

炭都の戦後復興

——雑誌『大牟田春秋』を読む

石川 巧

【凡例】

- ・本稿は、これまでの出版文化史ではほぼ言及されたことのない雑誌『大牟田春秋』（サン・タイムス社）に関し、総目次を作成するとともに、誌面の内容に関する詳細な解説を加えたものである。
- ・底本は大牟田市立図書館所蔵資料と国会図書館が所蔵するプランゲ文庫のマイクロ資料である。
- ・当時の雑誌では行末の句点や読点が割愛されている箇所があるため、引用に際してはそれを補った。
- ・明らかな誤字については訂正している。正誤の判断がつかかぬ表記についてはママ記号を付した。
- ・総目次の作成に関して広告等は割愛している。
- ・コーナーが点在している場合、記事タイトルはひとつしか記していない箇所がある。
- ・「編集」と「編輯」など、表記に揺れがあるものについては、表記通りにしたものと使用例の多い方に表記を統一したものがあ

1 はじめに

一八七三年（明治六年）に官営化された三池炭坑は、一八八九年に三井財閥へと払い下げられて以降、閉山（一九九七年）まで世紀以上に亘って日本有数の出炭量を誇る炭坑だった。産出された石炭を利用した化学工場の建設も進められ、戦前・戦中の大牟田は三井財閥が主導する鉱工業都市として発展した。

その三池炭鉱は、一九二四年の三池争議以降の度重なるストライキや労働争議に揺れ、財閥資本と労働者、あるいは、労働争議の渦中にある人々とそれを遠くから傍観する一般市民のあいだに大きな溝をつくりだした。また、戦時中、多くの化学工場が居並び弾薬や軍需用品の製造拠点となっていた大牟田は、一九四四年一月から終戦間際の一九四五年八月八日までに計五回もの空襲を受けている。新藤東洋男『大牟田の近現代史——鉱工業都市の歴史と現実——』

（大牟田の教育・文化を考える会、一九七七年四月）が、「軍需工業都市としての大牟田鉦工業都市は、その攻撃目標として常にマークされておりました。／昭和十九年十一月十五日の空襲による攻撃をかわきりに、二十年八月八日にわたって五回の空襲は、大牟田鉦工業都市を全く灰燼に帰するものでありました。大牟田市街地は一望の焼野原となつてしまいました。ことに第三回目の空襲であつた昭和二十年七月二十七日には、死傷者八六七人、罹災戸数八二三〇戸、罹人口四万一〇八八人を一瞬にして生み出してしまったほどのすさまじいものであります。／この戦災によつて大牟田市では、死傷者二二九一人、罹災人口五万五四一〇人、全市域の三分の一は廃墟と化しました。大牟田市役所議事堂は消失し、第一・第二公会堂、大牟田税務署、電話局、郵便局、国鉄大牟田駅、西鉄栄町駅、市立病院、若宮病院、火葬場をはじめ、不知火小学校、笹林小学校などの国民学校一四、青年学校一、中等学校二などすべて焼き払われました。三井鉦山三池鉦業所も焼き払われました」と記しているように、大牟田の戦後には日本近代における光と影が両義的に投影されているのである。

廃墟と化した大牟田は、極端な人口減少と財政難に見舞われる。一九四三年に一八三、〇〇〇人を数えた大牟田市の人口は、一九四五年に一二八、〇〇〇人まで激減している。大牟田市史編集委員会編の『大牟田市史 下巻』（一九六八年六月、大牟田市役所）に拠れば、同市の生活保護費は一九四五年度の三、五九七、〇五一円が一九四

六年には一八二、三〇五、八〇九円（約五〇倍）に、一九四七年には七七九、七四五、〇九四円（約二〇〇倍）に増大している。戦時対策として設けられていた母子保護法、軍事扶助法、医療保護法、戦時災害保護法、救護法（一九二九年四月二日公布、一九三二年一月一日施行）がGHQ／SCAP（以下、GHQ）の指導で生活保護法（一九四六年九月九日公布、同年一〇月一日施行、一九五〇年五月四日に新生活保護法が公布・施行）に全面改訂されたこと、生活保護基準の見直しによつて対象世帯が増えたことなど複数の要因が重なっているとはいえ、その激増ぶりは際立っている。

敗戦直後の大牟田から消えたのは日本人ばかりではない。戦時中、三池炭鉦では多くの朝鮮人が働いていた。一九四三年頃からは中国人を中心にアメリカ、イギリス、オランダ、オーストラリアなどの俘虜が動員されていた。だが、敗戦とともに彼らの多くは炭鉦を去つていった。戦後、三井鉦山株式会社三池鉦業所官浦坑に入社し掘進工として勤務した山根房光は、著書『みいけ炭鉦夫』（一九六一年一二月、労働大学）のなかで「二〇年六月、二四、四六六人いた労働者は、一月には、一〇、二八三人に激減」したと報告している。

鉄鋼とともに日本の主幹産業のひとつに位置づけられていた炭鉦が労働者不足に喘ぐ状況を憂慮した政府は、労働力補充のため重点的な資金の投入を行い、主食・衣料の特配、炭住の新設を行う。会社側も縁故による募集を大々的に行い、労働者を世話した者への紹介奨励金、新規採用者への出役奨励金などを用意した。外地からの

復員者、引揚者、あるいは国内で被災して仕事や住居を失った人々にとつて、炭坑は身体ひとつで生き延びられる数少ない職場だったため、一九四六年以降は新たな労働力が流入するようになる。三池炭鉱の労働者も右肩上がりで増加し、一九四六年二月には一九、〇〇五人、一九四七年六月には二六、六二二人、同年二月には二八、一三〇人となる。高木尚雄『地底の声——三池炭鉱写真誌』（弦書房、二〇〇三年五月）が、「衣・食・住に職のない時代に被災者、海外引揚者、復員軍人などの多くは炭鉱へ職を求めた、その魅力は賃金もさることながら、主食（米）の配給が一般家庭より多く、一人当たり本人六合、家族三合であり、一般の配給が一人二合一勺（二九七グラム）の食料難の時代であった。主食だけでなく副食や酒・煙草・作業用品まで配給料が増加され、いわゆる「マル炭」である。「マル炭」が欲しいばかりに、教師や銀行員を辞めて炭鉱マンになった人もいた。／政府の援助で炭鉱住宅の建設も進められ、荒尾市に緑丘住宅約一六六〇戸が建てられた。この時代は国の経済復興をさせるため、石炭の増産が叫ばれていた。出炭は戦時中のピーク時の同一九年（一九四四）には年産四〇〇万トンを超えたが、敗戦直後の同二〇年（一九四五）二年（一九四六）度は最盛時の半分もなかった。それが戦時中の荒廃を克服し、出炭を回復したのは、占領国アメリカの援助もさることながら、労働力の投入と膨大な資金と資材が優先的に供給された、いわゆる「傾斜生産」であった」と証言している通り、大牟田の復興は政府による膨大な資金投入と優

先的な資材供給によって促進されるのである。

ただし、こうした極端な肩入れ政策は、当然のことながら地域社会に様々な歪みをもたらすことになる。さきに引用した『みいけ炭鉱夫』（前出）のなかで山根房光が、「当時は生産の増強が至上命令のようにいわれた時代で国のためという殺し文句が私たちをたえず鞭打っていた。乏しい食糧事情のもとで、時にはビール瓶にオカユをつめながら、切羽にたちむかわなければならなかった。おまけに戦時中の濫掘で作業現場はあれており、落磐その他の災害で負傷者が続出した。文字通り「泣きながら炭を掘る」といわれた時代である。／期間をもうけて各種の増産運動が強行され、その報償として、酒、タバコ、砂糖、醤油などの嗜好品、生活必需品が特配された。多くの仲間はこちらの品物を主食と交換しながら最低生活をつづけていた。その頃、配給所に愚連隊がやって来て、物資を強請するといった事件や、配給物資の横流し事件などが起って、組合員をひどく憤慨させた。苦しみながら働いているだけに、その怒りは強く、その責任をばげしく追及したことも一再ではなかった」と述べているように、「生産の増強」を至上命令とされた炭鉱労働者は苛酷な労働状況に追い込まれるだけでなく、豊かな物資を目当てにやってきた「愚連隊」による脅迫や横流し事件にも巻き込まれていく。

だが、一九四九年二月から始まったドッジ・ライン（日本経済の自立と安定のため、GHQの経済顧問でデトロイト銀行頭取だったジョセフ・ドッジが立案した金融の引き締め策で、インフレ、国内

【図1】第二巻第一号の表紙



消費の抑制、輸出振興を軸とする）によって日本の経済政策は大きな転換期を迎える。同年四月には原料炭を除く大部分の石炭の配給統制が解除され補助金による優遇措置がなくなる。石炭鉱業は自由市場となり、激しい販売競争を強いられるようになる。一九五〇年六月の朝鮮戦争勃発にともなう需要拡大と好景気に支えられて一時的に石炭産業が息を吹き返した時期もあつたが、一九五三年以降のエネルギー革命（中東などで大油田が発見され、エネルギーの主役が石油や天然ガスへと移行した）によって、石炭産業は斜陽の一途を強いられることになる。こうして、一九六〇年前後には、経営合理化を阻止しようとする反対運動が三池闘争へと拡大し、同時代の日本を席捲していた安保闘争とも絡み合いながら過熱化する^{（注）}。闘争の過程において市民感情が分断され、組合／反組合の対立が市民生活の様々な側面に影を投げかけることになる。

炭鉱の存続に危機感を抱いた経営側は、設備の近代化と経営の合理化によるコスト引き下げを断行するとともに、労働者の削減、付加的資金の切りすてによる標準作業量の引き上げなど、さまざまな労働強化を進める。福利厚生関係の費用削減、計画中だった炭住の建設中止などが決まり、

労働者の暮らしは徐々に困窮を強いられるようになる。一九四九年四月から翌年一月までのわずかな期間に、休廃業に追い込まれた炭鉱は二〇〇坑を超えるといわれている。

『大牟田春秋』は、こうした危機が迫りつつあつた一九四八年一月に創刊された総合娯楽雑誌である。第一巻第一号の奥付に「サン・タイムズ社編集部発行／月刊大牟田春秋創刊號／第一巻第一号（毎月一日発行）／本號特価四十五圓（〒二圓）／昭和二十三年十月一日印刷／昭和二十三年十月十三日発行／発行人 林田隆／編輯人 村上悟／印刷所 大牟田小濱町 西田印刷所／発行所 大牟田市大正町一ノ二〇 サン・タイムズ社」（電二三〇四）とある通り、同誌は編輯から印刷発行まですべての作業が大牟田市内で行われている。創刊当時のスタッフは、社長の林田隆を筆頭に、副社長・村上悟、編輯長・田中重清、会計・塚川久江、編輯部・岡村栄、林田壽、松島庸夫、今村ひとみ、営業部・田中重清、佐藤久雄、田畑慶介、山本克己、政次三七徳、美術部・木村近義、囑託・井形松男、秋山霍彦、下川醇一郎、大隈健という陣容である。

第一巻第二号の編輯後記を読むと、「編輯部に元郷土雑誌「表裏」を主宰していた田中重清君を迎へる事が出来ましたので近く新企画の「夕刊、大牟田」（隔日発行）の準備を急いでおります、その他社内陣容を大幅に拡張して、人事相談部、結婚相談部、芸能部、商事部、書籍販売部も新設を企図致し既に結婚相談部は早や発足、二組成功し社会に明るく送り出してゐます。其中に読者をアツと云はせ

る様な面白い計画が発表されます。第三号は十一月二十五日発売予定で新年度は附録附、増頁の特大号で既に原稿は編輯部に山積されてゐます。(S・M生)とあり、サン・タイムス社が『夕刊大牟田』という夕刊新聞の発行を検討していたこと、雑誌や新聞の出版事業以外にも、「人事相談部、結婚相談部、芸能部、商事部、書籍販売部」などを設けて幅広い事業を展開しようとしていたことがわかる。第一巻第一号の編輯後記には、「面白く、明るい、ためになる郷土娯楽雑誌」をつくりたいと努力しました。これまで既に現れて居るべき筈のものを私達のつたない手で実現しようと思ひ立ちましたが、用紙と印刷事情で発行もすつかり遅くなつて其の上高価なものになつてしまふました。読者皆様にはまことに申訳なく深くお詫び致します。／産業都市、労働都市としての当市の特性を考へ、健全娯楽の不可欠な事は言ふまでもないことで、面白くて卑俗に流れず知性の香り高く而かも堅苦しくない雑誌誕生の要望にこたへて清新な個性と地方色を盛つた『大牟田春秋』を編輯して見ました」とあり、「産業都市、労働都市としての当市の特性」を踏まえた雑誌を作ることに重点を置いていたことがわかる。「健全娯楽」をモットーとしつつ、「卑俗に流れず」「知性の香り」高いものにするという宣言も含め、この雑誌には同時代の通俗娯楽雑誌との差別化を図らうとする狙いが強くあつたようである。また、第一巻第一号の巻頭に置かれた小木曾潤「大牟田春秋への期待」には、

昨年八月、私が自分の事業の為に十年振りで大牟田に帰つて来て、すぐ感じた事だが、大牟田市が十年前と少しも変らない殺漠さの儘であること、戦争中の荒々しい空気が未だに払拭されないで、何か粗暴で荒々しく、仮令へて云へば、アメリカ映画の西部活劇に出て来る開拓時代のバリバリユースト的なものを感じた。日本でも屈指の大炭鉱のある、化学工業都市であり、従つて労働者の都市でもあるこの街に、もつと潑刺たる文化的なる匂ひ、和やかさといったものが欲しい——と思つた。それから、この街の特殊な条件即ち旧三井系の大会社と、そこに働く労働者と、一般市民と、各自が別々に生活してゐるやうで、このことも可笑しいと思つた。会社関係の所謂インテリゲンチヤは会社といふ枠内で文化活動をしてゐるやうだが、それは市民の生活とは遊離してゐる、会社内部では各自新聞や雑誌を刊行してゐるらしいが人工十七万の都市であり乍ら一般市民の親しむ定期刊行物が皆無と言つて良い状態、これは二十世紀の奇蹟だ、正しいジャーナリズムの確立の為に郷土の新聞や雑誌が欲しいと、自分にも暇があればそれをやらう、と考へてゐた所だつた。(中略)／旧い大牟田から新しい大牟田に脱皮する為には、やはり林田君達のやうなヤンガーゼネレーションが必要だ。明朗な、健康な、住みよい郷土大牟田の再建に、今後『大牟田春秋』が果す役割は大きいと思ふ。

とあり、大牟田特有の事情が的確に綴られている。「戦争中の荒々しい空気が」が払拭されないままの「粗暴」な街。「旧三井系の大会社」で働く「インテリゲンチヤ」と一般市民が隔絶され、一部の特権性を有する人々だけが「文化活動」を愉しんでいる状況。『大牟田春秋』は、そうした「旧い大牟田」を脱皮して明朗で健康的な郷土を再建することを目的に創刊されたのである。

だが、果たしてこの雑誌は本来的な意味において「一般市民の親しむ定期刊行物」としての役割を担っていたのであろうか？ GHQの占領政策によって旧財閥が解体され、大牟田市内に点在していた三井系の企業が新たな出発を強いられていた時期に、新聞社でもなければ戦前から出版を手がけていたわけでもない「サン・タイムス社」なる会社が、いきなり総合娯楽雑誌を発行しようとした背景にはどのような目論見があったのであろうか？ 『大牟田春秋』は必ずしも著名な書き手が作品や記事を寄せた雑誌ではないし、明確な方針や論調をもって継続されたものでもないため、現在から見て必ずしも貴重と思われる記事が並んでいるわけではない。だが、少なくとも戦後出版文化史において詳しく言及されたことがない稀覯雑誌であり、資料保存機関が限定されていることを考えると、その内容を広く紹介する一定の意義があることは間違いない。また、戦後日本における炭都の衰退、労働運動の高まりとそれに対する一般市民の認識などを考えるうえで同誌は貴重な資料である。そこで本稿では、『大牟田春秋』の内容を精しく紹介しつつ、これらの問題

に対する応答を試みたい。

2 『大牟田春秋』の創刊と民間検閲局(CCCD)の検閲

敗戦後の大牟田で最も早い時期に発行された文芸雑誌は、三池炭礦労働組合によって結成された炭都文化クラブ^(注2)の機関誌『炭都文化』(一九四六年六月二十五日創刊、編集兼発行人・大森淳義、のち発行人が三池炭鉱労働組合となる)である。大牟田文化史・年表編集委員会編『大牟田文化史・年表』(大牟田文化連合会、一九八六年七月)に所収された野口晋一郎の概説によれば、同誌は「創作・詩は勿論のこと、音楽・美術等と、一種の総合誌の観を呈し」ていた。また、創刊一周年を記念して編まれた「炭都文化年譜」(『炭都文化』一九四七年六月)によれば、同誌は一九四六年四月一八日に第一回の打合せ(於・産報会館)を開催して誌名を決定し、以後、雑誌の発行とともに座談会や音楽会^(注3)を定期的に行うことで文化運動の推進に取り組んだということである。

だが、『炭都文化』は一九四八年八月発行の第一二号で終刊する。その精神は一九五〇年四月創刊の第一次『三池文学』に引継がれたものの、同誌も一九五三年の三池闘争で廃刊に追い込まれる。

その他、一九四六年六月には三井東洋高圧大牟田鉱業所文芸部の機関誌『炬塵』^(注4)が、同年九月には中島立雄を編輯兼発行者とする『緑地帯』^(注5)が発行されている。日肥筑支社の文学愛好者が集う新樹

文学同好会の『新樹』（一九四八年五月創刊、編集発行人・石田清明）、大牟田文芸クラブの『花冠』^(注5)、『緑陰』（一九四七年二月創刊）、『灯影』^(注6)（創刊不詳）といった雑誌もあったようである。

なかでも、『花冠』を発行した大牟田文芸クラブは戦後の大牟田における文化運動の嚆矢となった団体であり、大牟田市史編集委員会編『大牟田市史 補巻』（大牟田市役所、一九六九年五月）によれば、国内外の有名演奏家を招聘しての音楽公演を毎年数回開催したりもしている。また、この事業は一九四八年頃から三池染料音楽愛好会（三池染料の福祉事業、会員は三染職員、従業員と家族および一般市民）と大牟田音楽愛好会（全市民からの会員制）に引継がれ、一九六三年頃まで公演活動を継続したのち、両者が合併（一九六三年一〇月）して大牟田音楽愛好協会の結成へとつながった。

一九四八年三月には詩と詩論に特化した雑誌『Pioneer』（編集兼発行人・出海溪也、印刷人・大牟田市小浜町二五 西田一郎、発行所・福岡県三池郡渡瀬 詩郷社）が創刊されている。第三号（一九四八年六月）に掲載された「近代の倦怠をめぐる反語的座談会」（一九四八年四月九日にピオネ支社・熊本地方連絡所で開催）には、鮎川信夫、北村太郎、田村隆一、三好豊一郎、木原孝一、出海溪也などが出席しており、戦後を代表する荒地派の詩人たちとも深く交流していたことがわかる。^(注7) 前衛詩人サークルによれば、『Gague—逆—』（発行所大牟田市船津町三十七九一）も含め、大牟田にはいくつかの有力な詩誌が誕生していた。

『大牟田春秋』は、これらの文芸雑誌とほぼ同じ時期に創刊され、第一巻第一号（前出）以降、第一巻第二号（一九四八年一月八日）、第一巻第三号（一九四八年二月一日）、第二巻第一号（新年特大号、一九四九年一月一日）、第二巻第二号（陽春号、一九四九年四月一日発行）、第二巻第三号（夏季特別号、一九四九年七月一日発行）の計六冊が発行されている。第一巻第一号の奥付で「月刊」を謳っていたが、実際には第二巻第二号以降、三カ月毎に出すのがやっとなという状況に陥り、通巻六号で終刊していることを考えると、雑誌の継続には様々な苦労があったものと思われるが、地元新聞社の支援により安定した読者を抱える雑誌ではないにも拘らず、誌面の構成、内容ともに高い水準を保っており、印刷用紙さえ安定確保できていたら息の長いローカル誌になっていたのではないかと思わせる出来栄である。

現在、同誌の所蔵が確認できるのは、国立国会図書館のプランゲ文庫資料の第一巻第二号〜第二巻第三号（計五冊）、大牟田市立図書館の第一巻第一号〜第二巻第三号（計六冊）、北海道立図書館の栗田文庫の第二巻第一号のみである。さきに紹介した『大牟田文化史・年表』（前出）や『大牟田市史 補巻』（前出）はもちろん、最新の研究である茶園梨加「労働闘争のなかの文学——三池と文化運動——」（『立命館言語文化研究』二二巻二号、二〇一〇年一月）にも紹介されていない。また、大牟田市立図書館の所蔵雑誌には「大牟田市谷町二番地 森歯科医院」のスタンプが押されており、同医

院からの寄贈であることがわかる。つまり、同誌は雑誌のほとんどが流通していた大牟田市内にすら残っておらず、このような雑誌が存在していたこと自体が忘却されてきたのである。

その理由のひとつとして考えられるのは、印刷用紙の調達が難しかったため発行部数を制限せざるを得なかったのではないかということである。第一巻第一号には「本誌の御購読に就て」という社告があり、

本誌はあくまでも、郷土の皆様の一夕の娯楽雑誌たる事を使命として誕生致しました。／あくまでも、明るく、楽しい面も中央の雑誌に劣らぬ、美しい雑誌にしようとする努力いたしてをります。／然しながら、地方印刷界の実情は徒らに印刷費の高騰のみを招いて、「面白い雑誌を安く」といふ私共の初志とは遠い隔りのあるものとなりました。／このやうな隘路の為、当分は一般書店への割当は謹少と思はれますので、直接本社宛御予約願ひます。／（御住所御氏名を御一報の上御予約頂けば、本誌会員として優先的に発送致します）

とあるが、この文面からは、一般書店を通して流通させるほどの部数を刷ることができず、直接予約をして申し込む方式だったことが確認できる。また第一巻第二号を見ると、「★創刊号売り切れの御挨拶」の見出しとともに「博多に博多を語る名物雑誌「うわさ」の

在る如く、大牟田市にも雑誌がなくてはと市民の方々の御要望に答へ、誠心誠意を込め「大牟田春秋」創刊号発刊致しましたところ、期せずして売り切れの嬉しい街の声を聞きます事は、感謝に堪えないところでございます」という謝辞が掲載されており、第一巻第一号は期待通りに売り切れたことが確認できる。

また、ブランゲ文庫所蔵の『大牟田春秋』を見ると、それぞれの表紙に「PROCESSED EXAMINATION」「STOPCHECKED」「PASSED」といったスタンプが押されている。GHQの民間検閲局（CCD）による検閲は一九四九年一月まで続いているため、同誌はすべての号が検閲の対象となっていたものと思われる。

ただし、第一巻第一号には溝口記「あの頃のストライキ▽…大正八年夏に起つたストライキ…△突如！万田坑暴動化す…三池全山も一斉ストに突入」という記事があり、当時の争議団の様子を詳細に報じるとともに、彼らのストライキ闘争を支援した大牟田市民にも焦点があてられている。「会社工場めぐり」という連載記事の第一回では、いままさにストライキに突入しつつある三井染料工業所を取材し、「幸ひ組合幹部が占領下にある事をよく認識したからであらうが然し二度と骸炭部のストは出来まい」といった論評が寄せられている。詳細は後述するが、この第一巻第一号に限って言えば、GHQに遠慮することなく自由な言説が垂れ流されている印象がある。

第一巻第二号以降の検閲資料を見ると、まず、第一巻第二号には

編集部から福岡米軍第三検閲局刊行課に宛てられた手書きの文書が添付されており、「本日、辛て印刷が終了しましたから早速、御送り致します。／何卒、宜敷くお願い致します。／何と申しましても

地方の雑誌ですので其点 悪しからず／御承認下さいます様／御願
い 申上げます／先づは、簡略乍ら／右 御願まで／昭和二十三年

十月十三日／サン★タイムズ社／大牟田市大正町一ノ二〇／電話二
三〇四番／月刊大牟田春秋／編輯部 村上悟」とある。また、同号

には同じく福岡米軍第三検閲局刊行課に提出した回答書（一九四八
年一〇月二二日付）が付されており、「発行部数 五百部」「刊行物

の種類及編輯方針 大衆娯楽 郷土諷刺雑誌 明ルク楽シイ市民ノ雜
誌 ニスルコトヲ以テ編輯方針トスル」「経営主体 個人経営」など

の情報が記されている。この回答書は第二巻第二号にもあり、こち
らでは「発行部数 一〇〇〇部」「編輯方針 郷土大牟田市娯楽雜

誌／郷土紹介と併せて大牟田文化運動昂揚に又、娯楽記事、社会、
商店記事等面白く明るく編集せんとするもの」「経営 合資会社」

となっている。二つの回答書を比べると、発行部数が五〇〇部から
一〇〇〇部が増えていること、編集方針が微妙に変化し、同じ大衆

娯楽雑誌でありながら「文化運動」の側面が強調されるようになって
たこと、経営が「個人経営」から「合資会社」に移っていることが
分かる。

記事の内容に関しては、第一巻第二号に掲載された小松茂の随筆
「おしやべり岬」のタイトル脇に「Key Log」と書かれ、「アメリ

カの兵隊さんも日本の花嫁さんをつれて帰ることになって、その結
婚の登録の締切日には、領事館は夜の十二時まで受け付けた」とい
う記述のうち「アメリカの兵隊さんも日本の花嫁をつれて帰る」に
傍線チェックが入っている。さらに同号の「街のうわさ」というコ
ラムを見ると、

——政党政治の行はれてゐる今日、政治は各自の支持政党に依
て行はるべきであつて、労働組合は飽迄経済団体であり政治団
体ではない故に争議のスロガンに内閣打倒を叫ぶのは可笑しい、
共産党の手先きでございませと告知してゐるやうなものだ。／
「労働攻勢で内閣が倒れたら、内閣を倒したのは吾々労働者の
力だ、政権は吾々労働者にと共産党が出て来て、人民共和政府
樹立と来る。政権奪取の手段に労働者が共産党に利用されてゐ
る事を、多くの労働者諸君は理解してゐるのかしら？」／大牟
田の共産党の活躍は目覚ましいが、全じ労働階級政党の社会党は
一体何をしてゐるのか、内輪もめが能でもあるまいに。

という記事に「Communism」というコメントが付され、「労働攻
勢」から「理解してゐるのかしら？」までカギ括弧が付されている。
この記事は共産党やそれを支持する労働組合の躍進を賞揚するもの
ではなく、むしろ、一般労働者にとってそれが懸念すべき課題だと
いう問題提起をしているものだが、検閲官は「共産党」という表記

自体に反応してチェックを入れたのであろう。そこには、一九四九年以降、GHQが強行するレッド・ページの影響が感じられる。

終刊号となる第二巻第三号を見ると、「街のうわさ」というコーナーにある「官僚 未だ死せず」という記事の全文に縁取りがなされ、「記事訂正シマシタ!! 理由ハ発刊届ニ記載済：編集長〇印」と記されている。実際に流通した誌面を見ると、記事の内容も完全に差し替えられている。検閲資料には訂正前の原稿も残されているため、ここでは削除された記事と新たに挿入された記事の全文を紹介する。

【修正前】

これは手剛い花嫁サン。

過日、三池高校への嫁入りを嫌つて一騒動起した大牟田商業。今度は逆に花もいじらしい大牟田市立高女がお嫁入りして来るといふので、商業氏、うれいような迷惑なようなくすぐつたい気持ちで勉強もテンデ頭に入らぬと嘆いている。ところが、今度の花嫁も矢張りなかなかの変り者、黄色い声をはりあげて夜は十一時頃迄、三川町も遊郭のお姐さん達の間で伍して署名運動に必死「勿論、反対ですわ。商業と一緒になるなんて」となかなかの鼻息、いぢらしい気持ちも分るが、娘にもしものことがあつてはと心配するのは父兄の方「夜もロクく寝られない、早く解決してくれないのか」と嘆いているとか。

スワ、第二下山事件！（大牟田版）

某日、西栄鉄町駅付近引込線で「借金と使い込で自殺した」三鉦健康保険係甲斐田氏の一件が帝都でさわいでいる国鉄総裁の他殺事件に余りにも類似していると親戚の某君、目下必死になつて貝田氏の足どりを調査中だとか、成る程、他殺といえれば他殺らしい、先づ、
／一、遺書が全然無かつた／二、未亡人静子夫人（三三）は全然それらしいそぶりがなかつたという点／三、出血が比較的少なかつた
／四、死隊はあたかも置いてあつたかの様に頭と足がきれいに切断されていた点／五、前夜は十一時過迄、某飲屋で或る男と飲んでゐた、そして三時間後に自殺した。／其他大分疑わしい諸点があるといふので静子夫人も警察に持ちこむと既に騒いでいる模様で若しや第二下山事件ではあるまいかと専の噂ならぬわ」成程、なかく貴方は計算もお上手です。

【修正後】

官僚 未だ死せず

大牟田線の某係は人間見て言葉態度が変わるとか、一度荷物を送りに行つた柿園町のK子さん、余りの不親切さにウツン今尚止まず目下一里四方に同係の不親切ぶりを吹聴中とか、そもく之は変な云いだしだが、その係が現在の場所に移転せぬ前の老主任、主任当時はさ程までもなかつたが、停年にて老主任退職のあと若き主任殿にては統率出来難いのか、現在の顕著な御親切ぶりとか

「えらい事ぢや!!」

避妊書の決定版と仰々しく銘打つて販売中の婦女界別冊は宣伝の効き目あつてか売れ行き大好調！買つて行く客種を見るとこれは意外、花もはぶかしい十八娘が大半と聞いてはものも云えぬ。中には時折女学生風の御客様も有り、売つていゝやら悪いやら、ちよつと始末に困りますとは栄町某書店の話。／此書には萩野式避妊早目ゲージの附録が付いて居り必要な人には必要な本、これで値段は九十五円、どうですか。

「メめて賞金二万円也」

某日、某所で例によつて開催されたのど自慢、賞金二万円也と宣伝文句も華やかに開幕されたが、さて一等になつた某嬢、胸ワクワク賞金を開いて見たら何と二千元也、とあつたから三等か四等の間違ひではないかと周章で、主催者に聞いてみると「二万円とは一等から五等まで全部合せてですよ」との御返事、あゝのど自慢の影に悲哀ありと嘆いて「でも一等が二千元だと全部合せても五千円位しかならないわ」成程、なか／＼貴方は計算もお上手です。

修正前と修正後の記事を比較すると、GHQがどのような記事に神経を失らせていたかがよくわかる。まず重要なのは、「国鉄総裁の他殺事件」として世評を賑わせた下山事件との類似点が指摘される事件に関する記事が、まるごと削除されていることである。記事

の内容を読んでも検閲の対象となりそうな記述は見られないが、下山事件については、のちに松本清張が『日本の黒い霧』（『文藝春秋』一九六〇年一月〜二月）でアメリカ陸軍対敵諜報部隊が関与した他殺説を主張するなど、さまざまな疑惑がつきまとつていた事実があるため、ここでの全文差し替え措置には留意する必要がある。

また、もうひとつ注目したいのは、大牟田商業と大牟田市立高女の統合問題についても記事がなくなっていることである。この記事には「三川町も遊郭のお姐さん達の間伍して署名運動に必死」という一節があるため、遊郭に関する言及が風俗紊乱と捉えられてしまった可能性もあるが、いずれにしても、検閲による処分を恐れた『大牟田春秋』編集部の過剰な反応振りが浮かびあがっている。

一方、修正後の記事を見ると、相手をみて言葉や態度を替える「大牟田線」職員の不親切さを「官僚 未だ死せず」と批判する記事、「避妊書の決定版」という触れこみで売り出された別冊『婦人界』の紹介、そして、「のど自慢」の賞金に関する記事と、いかにも地域住民に密着した情報になっていると同時に、GHQの占領政策にも一切抵触しない内容になっている。逆にいえば、当時のGHQは地方ローカル雑誌のゴシップ記事にまで細かく目配りし、自らの占領政策に照らし合わせて不都合な記述を差し替えていたということである。

3 『大牟田春秋』に描かれる市民生活

『大牟田春秋』で俳句、川柳のコーナーを担当する岩田土筆が第一巻第一号の「春秋柳壇」のなかで「吾々は戦争中より笑ふことすら弾圧されてゐた、そして敗戦の現実には本当の笑いすら取戻し得ない有様である、これから立ち上る日本国民に如何に明るい笑いが必要であるかと云ふことは言を俟たない。／書籍にはエロ、グロの利益主義の雑誌が氾濫した。吾々に真の良心があるならもう少しユーモアを愛し明るい家庭生活を築くことが急務ではないかと思はれる。／此度大牟田春秋が創刊され、笑いの文学たる柳壇を設けられたことはまことに欣快に堪えない、僕は双手をあげてユーモアを愛する月好の志をお迎へしたい」と述べているように、同誌は戦争中から「笑い」を弾圧され、明るい「笑い」に飢えていた人々に良識あるユーモアを提供することをめざして創刊された側面がある。ただし、発刊にあたっては予想以上に費用がかさみ、第一巻第一号は赤字という状況だったようである。第一巻第二号の「編集後記」には、その苦境ぶりが、

果して第二号は出るだらうか―創刊号を手にした方の全てが、さういう疑念を持たれたに違ひない。それほど、創刊号には費用がかゝつた。自惚れでもなく、とにかく今までに無かつた雑

誌を、という吾々の気持が、地方誌には珍しいくらいに体裁を整えてデヴューした。勿論、創刊号は色んな点で不満も多かつたし、経済的には「原価」を上廻るといふ結果になつてしまつた。打算的に見ればこんな馬鹿げた経営法などあるものではない。然し吾々は当初から郷土が誇り得る、大牟田を訪れる人、大牟田を語る人が自慢出来る雑誌を―と、そのみに予想外の高価なものになつてしまい、何とかして多くの方の目に止まるやうにと願つた吾々の希望も、常識外の薄利の為に「販売」を拒絶された書店も多かつた。

と語られている。また、それに続く記述では「郷土文化の意義と吾々の熱意とに御賛同下さつて、終始気持よく「販売」の労を取つて頂いた、上野金善堂、田中栄文堂、古閑書林、松屋、平野書店の各店主、並びに中座、国産劇場、金映の各支配人に誌上より重ねて深甚の謝意を表したい」といふ具合に、わざわざ書店名まで並べて謝意を表している。残念ながら、同誌はわずか六号を世に送り出しただけで休刊となるわけだが、最終号となつた第二巻第三号の「編輯後記」には、

☆地方雑誌と雖も果す役が広い意味での地方啓蒙の意図が含まれていることは知つているが、然し、この多彩な目次には編集子聊さか、羊頭をか、げて狗肉を売るの観なきにしもあらず。

／☆陽春号が出て以来しばらく出版出来なかつたのは週刊サン・タイムスの発刊のためだと云つてしまえば、それまでだが、また編集子の努力が足りなかつた事は読者にお詫びしなければならぬ。☆来る九月はサン、タイムズ誕生一週年だ、かえり見れば九月、月刊大牟田春秋創刊。十月、芸能部設置「バラ座」「文楽人形」「空気座」等有名芸能主催し、直営書籍販売設置、本年四月には待望の「週刊、サンタイムズ」を創刊した。われ／＼は一步／＼基礎を固めて行つて積りだ。／九月には、かねての懸案だつた久留米、荒尾両市、柳河等近接の都市に支社支局を設置し、事業並びに販路の一大拡張を企図している。

とあり、タイトルを『筑後春秋』に改題して新しいスタートを切る構想があることを伝えている。こうした「編集後記」(号によつて「編輯後記」という表記もある)を読む限り、『大牟田春秋』は同時代に雨後の筍のように誕生した通俗雑誌とは違い、市民生活を豊かにし「郷土文化」を向上させることを目的とした雑誌であつたことが確認できる。

また、第一巻第一号から始まる「名士を裸にする」というシリーズの第一回が藪中虎之助「大牟田市長 田中忠蔵とは……どんな男か?」から始まっていることから明らかなように、『大牟田春秋』は創刊当初から市政の監視を編集方針の中心に置いている。焦土と化した大牟田を行政がどのように復興させようとしているの

かをメディアの視点で追及し、それを批評する役割を自任している。たとえば、こちらにも紹介した「街のうわさ」というコーナーでは、

労働者の都市だけに、大牟田はより文化的に、健全に明朗に再建されなくてはならない。／大牟田労働会議が公安委員会のリコール^{マモ}と井村大牟田市署長の追放を確認したと日刊紙は報道した。／大牟田市が労働者の都会である事は認めるが、労働者独裁の都市にされて了つては一般市民は堪らない。／マ元帥の言を藉りる迄もなく、日本の敗戦の結果最も大幅の利益を享受したのは日本の労働者諸君だ。一般中小企業者は諸君の如く困結してゐない為もあるが、政府の税金攻勢と金詰りで歴死しやうとしてゐてもその文句を持つて行く先がない。

と指摘されており、『大牟田春秋』という雑誌が必ずしも労働組合の活動を推進する側に立つ言論雑誌ではないことがわかる。また、第一巻第一号の「春秋おるか歌」(新愚生)というコーナーには「主筆さん、市長は、社長の縁つづき、裸にするも遠慮なしたん」という戯歌があるし、第一巻第二号には大牟田市議会議員、大牟田地域選出の県議会議員が連名で「祝 創刊」の広告を出している。第二巻第三号には春秋生「市会議員三十八人列伝」(其の二)が掲載されている。こうした記事を総合すると、『大牟田春秋』は市長や市

議会が進めようとする地域行政を監視しつつも協力する立場で編集されていることがわかる。資本家でも労働者でもなく、広汎な一般市民の利益享受をめざしていることがわかる。

敗戦直後の大牟田でとくに問題になっていたのは治安の悪さと犯罪の多発である。同号のG・W生「犯罪都市大牟田 激増する少年犯罪」を読むと、大牟田では「月に六百倍」の犯罪が起こっているという指摘があり、特に少年犯罪の多発が懸念されている。

——二十一年は四千七百余件、二十二年は五千四百余件、今年になると八ヶ月間で三千七百余件で十九年よりも多くなっている。今年度のうち最も多かった月は五月の六一七件二月の五七七件、八月の五〇一件となつてゐるが今後益々殖える事は間違ひないと見られるが、次に考へさせられるのは青少年犯罪であるが、十九年二五〇件、二十年一八三件、二十一年五五三件、二十二年五〇三件、二十三年（八月まで）三八〇件とグングン殖えしかも凶悪犯罪が多いことは注目すべきところであらう。即ち殺人八、傷害二十七、強盗十七件の発生を見てゐるが表面にあんまり出ない恐かつなど相当あると見なければならぬ。

という文面からは戦後の荒廃した世相が垣間見えている。本稿の末尾に付した【補助資料】からもわかるように、敗戦後の大牟田市は人口一四四、一七七人（一九四六年）であり、規模としては地方小

都市といった程度に過ぎない。そのような街で年間五、〇〇〇件を超える犯罪が起こり、一九四八年に入ってからわずか八ヶ月で殺人事件が八件起こっているというのは尋常な数字ではない。また、この記事によれば大牟田市における犯罪は「凶悪犯罪」が多く、表に出ていない「恐かつ」なども少なからずあるということだから、市民はその治安の悪さに様々な懸念を抱いていたものと思われる。

また、第一巻第一号の「新地アパートにも秋は来る」という記事には、「元遊郭跡の戦災アパート」に集う人々の暮らしぶりが以下のように紹介されている。

新地の元遊郭跡の戦災アパートは何処ですか？と長たらしい言葉を費さないでも『新地アパート』でもう通用する。それ程有名で大牟田名所の一つに発展しようとしている新地、小浜町アパート、古い大牟田の地図を見ると海のもの山のものとも所属もはつきりしない様などころに戦後急速に建てられた急造庶民住宅がある。一寸見ると倉庫か細長い一軒家に見えるバラツク建これぞ急造爆雷式アパートよく／＼そばに寄つて見るとある／＼窓がずらり上下二段十程並んで一段並びに八つも器用に仕切つてある。（中略）冬夏に鍛へ春秋に働く庶民住宅の人々、日雇労働者あり、警察官、先生、新聞記者あり官吏あり、左官、時計師、ブローカー果してカド階級、もあるといふ。あらゆる職業の人々が同じ一つの棟に仲良く住んでゐるのだから稀には

隣組争議のあることもある、が努めて感情を押へ歩調を合せてゐる姿は洵に麗しい。

この記事は、戦災で棲家を失った人々がバラック建ての「急造爆雷式アパート」に集う様子を取材したのだが、ここで記者が強く訴えているのは、雑多な職種の人々が「努めて感情を押へ歩調を合せて」いること、すなわち、収入や立場に関係なく肩を寄せ合いながら生きる庶民の逞しさである。

その証拠に、記事の後半には「一棟のアパートに住み込んだ四六の三十二軒といふけれども実際は一軒に二世帯三世帯もある由、入居条件が家族四人以上となつてゐるから四十世帯百五十人以上の間が住んでゐる訳だ。中には六畳四畳半の二間に十人以上雑魚寝してゐるもなきにしもあらずとの事、社会課では壕よりよいと鼻高々、尤もな話ですバイ隣と云つても次の部屋といつた方が早い隣人との親しさは一吋白金や延命あたりの高台にデンと構へてゐるブルジョアの隣づきあいとは違ふ」という文章が挿入され、高台に暮らすブルジョアへの皮肉が述べられている。それは、戦前、戦中において三井財閥の企業城下町として繁栄した大牟田の本質を見つめる視線であると同時に、ブルジョアとプロレタリアートのあいだに大きな格差が生じている現状を住環境から捉え直す指摘でもあったと思われる。

さらに、第一巻第一号に「随片想々」を書いた古賀ミサヲ（元大

牟田市婦人会長、家事審判所調停委員）は、「最近ある地方の未婚女性に性病患者が七〇%もあつたといふ事実は何を示してゐるものでありませう、純潔教育の必要性を声を漕らし叫びたくありません。

「享楽」と「自由」とを履き違へた若き人よ。大きく心眼を見開いて眼前に展開する神聖な結婚を凝視して見ようではありませんか」と述べ、未婚女性の性病患者が多いことを憂えるとともに「純潔教育」の必要性を訴えている。「未婚女性に性病患者が七〇%もあつた」という数字が実態を反映したものでどうかはわからないが、未婚女性がなぜ無謀な性行為に及ぶのかという根本的な原因に迫ることなく「純潔教育」を強化という安直な解決策を模索していること、性病罹患の責任を女性の側に押し付けている点で戦後占領期における女性解放運動の限界を示しているといえるだろう。

女性の性意識が奔放になりつつあることに対しての警戒心は、第一巻第二号に「情痴事件簿通信 大学生に恋した六人の子を持つ母情死事件通町」という見出しで掲載された記事にも表れている。

彼女は三年前、突然愛する夫に死別した時のあの救い難い絶望を思ひ出してその日一日烈しく悶えた、愛する者との別離を再び繰返す事がどうして出来よう、二人でどこか人の知らない遠い所にでもと夢の様なあこがれが浮ぶ、だが残して行く子供達の事を考へると所詮出来ない相談である。その日一日彼女は考へ、悶えたあげく死が唯一の光明となつて彼女の心を奪つた。

(中略)／満洲引揚当時携行して来た青酸カリもある、唯明日は今世の思ひ出に子供達を一日楽しく遊ばせ腹一杯の御馳走を喰べさせればいゝのである、だがやはり未練がつきまるとつてくろのだつた、性に対する愛着、これもある。だがそれ以上に愛する達雄と一緒に手を取つて死ぬことが出来たらといふ彼女の願は今でもどうしても消すことが出来ずに彼女の心の中に残つているのだつた。

この記事は、満洲からの引揚げ、夫との死別といった苦難を経験し、六人もの子どもを必死で育てていた母親が大学生と恋に落ちた挙句、子どもたちと心中を図るところまで追い詰められた実話をもとに、記者が想像を巡らせて読物に仕立てたものだが、その書きぶりは明らかに女性の「性に対する愛着」を不幸の源と位置づけ、それを断罪するものになっている。「情痴」という言葉はその象徴である。

同じく第一巻第二号には、山名記者「アベックは愉し〜その詳細をお知らせします〜アベックは二人だけのもの」というルポルタージュがあり、訳ありアベックの会話が以下のように再現されている。

——しばらく女はもじ〜してゐたが体の倒れを起こして指輪のある左手を男の手の上に置きながら「驚きになりませんそれをおききして——でない」と。／精一杯の語調でそれだけ云

つた。……何か不吉予感を感じた様に男は——それでも不吉なものに魅力を感じて、／「驚かない、二人の間の事だもの——驚かないとも。」上記した声を無理に殺した様な声で云つたものだ。／『出来たらしいの、間違いちやないかと思つたんですけど——』。／男の顔には激しい狼狽の色が浮んだ。そして突然、女を抱きすくめるとその耳許で記者に聞きとれぬ小さい声でさ、やいた。記者はアベックが次第に悲劇的になる二人の身の上を気の毒に思つた。秘密が秘密でなくなつた時に悔悟と不幸とが伴つて来る様に男にも悔悟に似た本心が呼び起つたのではないだらうか——と突然、「そ、そんなこと、そんなことは出来ません!」。正しく絶叫に似た悲痛な叫びであつた。

この記事は、表面上、アベックの生態を捉えたルポルタージュのようにみせているが、実際は望まない妊娠がもたらす悲劇を読者に知らしめようとする教訓的な内容になっている。さきに紹介した情死事件と併せて考えると、それはある種の誌上キャンペーンのように見え見えてくる。

こうした文脈は第二巻第三号の「産児調整座談会」にも継承されている。この事件が騒がれる背景には、たくさんの子どもをもつ母親の性道徳を問うだけでなく、妊娠に対する無知や計画性のない出産を指弾するような視線が潜んでいるのである。実際、この座談会では妊娠に関する様々な話題が提供され、「陸外射精法」という章

では、

後藤 『中絶性交法、俗に云う膈外射精法はもつとも人に知られた正確な避妊法ですが、射精前に精子は僅かに出る場合もあり又何度もこの方法を用いると神経衰弱になる恐れもありますから完全な方法とは云われません、また、女子がオルガスムスに達しなければ妊娠しないというのも一応考えられますが、これも正確ではなく、不感症でも強姦されても妊娠している例もありますし完全な方法とは云われません。／以上の方法はながらく続けなければ精神的によくはない結果になるから注意しなければなりません。』

古賀 『性交後起き上つて咳をしたり跳躍をすると受胎しないと云われていますが本当でせうか』

医師会 『最も原始的な方法ですね、心理的にも極めて不自然な方法で確実性は極めて少ないでせう』

園田 『授乳期間中の受胎は』

医師会 『百害あつて一利なしというのでせう、またこの方法は乳児にも悪影響を及ぼしますから絶対やめなければなりません』

桑野 『とも角、簡単ですむのはサツクですね、一分間もかゝらないし、これに使用感さえなかつたら万点なんですがね』

後藤 『サツクを使用することは不自然さを覚えるがそれは間違つた考へだ、ゼリーは何としても経済的な負担がからむ、そうい

つたことで実行が伴わなわなとしたら法律が空文となる』

といった議論が展開されている。登壇者たちは避妊具の使用に関する具体的な指摘を大真面目にしているが、そこから浮かびあがってくるのは、多くの人々がいかに避妊に対する知識がなく、根拠のない方法で妊娠を回避しようとしているかという恐ろしい現実である。

通常であれば座談会は独立した記事ということになっているのだが、『大牟田春秋』はなぜかこのテーマについて強い思い入れがあったらしく、「受胎調節は是か非か」というアンケートの回答、九州大学細菌学教授・水島治夫による「産制問題は何故重大か」という論説、そして優生保護法に関する解説記事などを掲載している。この特集ページには大牟田市内の産婦人科、性病科の医院、および薬局がずらりと並んで広告を出しており、まさに、産児調整問題に関して市全体が運動を推進しているような趣になっている。

一方、『大牟田春秋』は、良家の子女をグラビアに登場させたり、「職場の花」と銘打って三井財閥系の会社に勤務する明るく健康的な女性を紹介したりすることに積極的である。また、結婚相手を募集するコーナーもあり、結婚を前提とする健全な男女の交際については実に肯定的である。たとえば、第二巻第二号「求婚のしおり」コーナーには、「求妾 健康美肉体美ある三十前後係累なき美人外交手腕自信あり随時旅行可の人当方四十土建会社重役妻子在京孤闘悩む／秘九号（市内大正町〇組）」といった紹介記事とともに、「五行

「五百円十行百五拾円」の掲載料で紹介広告が出せますという案内が掲載されており、結婚相手の斡旋が雑誌の収入源のひとつであったことがわかる。さらに、山本房雄「横目で見たミス大牟田（ミス・大牟田審査の手帳から）」（第二巻第二号）のような記事まで掲載され、「ミス大牟田に応募の希望を持つ方々に当選？の秘訣を公開しよう。「美ぼう」「知性」「体格」が三位一体で審査されるのであるから「美人」の方は高ぶらないこと」「知性」のある方はどしどし發揮すること、体に均整を保つて歩くこと、審査員を恐れないこと、知らないことは正直に知らないと答へること、明朗であること、女性の魅力の中に無邪気さのあること、心ずしも美人ではなくても「美」「知」「体」に均整がとれていれば十分である……」などという指南がなされている。こうした記事の内容や構成を見る限り、『大牟田春秋』には、女性を類型化し、女性を清楚で上品で知的な良家の子女が結婚によって幸福を再生産していくことを期待すると同時に、情欲にまみれた女が望まない妊娠や痴情のもつれによって身を墮としていく姿を反面教師的に描こうとするイデオロギーが内在しているといえる。

もうひとつ、当時の大牟田で顕著だったのは、外地からの引揚げ者とその家族、あるいは戦後もシベリアに抑留されていた人々に関する話題が少なくないことである。たとえば、第一巻第三号の「おののくトシネル市場 銀座商店街の巻」には「私達は皆引揚者ですよ、遠い満洲や中国からリュック一つに生命を托して漸く辿り着い

た連中ばかりで、今やつとどうやら息つきかけて来たと思つたら早や追出される、全く、これから何うして立ち上がれませう』想えば不幸な人達ではある。／不幸な日本人の中でも引揚者たちのみじめさは亦一入。情に棹させばなんとやらでお役人様もむづかしい。ま、ならぬは浮世の常とは此の事か」といった記述があるし、第二巻第一号の嵐五郎「墨汁一滴渡り鳥」には、

——シベリアの野に故国恋ふ人たちが、／「我が思う人のあるやなしやをこと問ふ」かりの姿だと涙ぐむ人も多かつたのである、ソ連からの引揚はまた明春まで中止となつた。この冬もまた渡り鳥が多からう。／これは十二月十三日付朝日新聞の天声人語の一節であるが、私はこれを読みながらやはり涙ぐんだ、四度零下五十度、六十度の冬を異国の丘に迎へる同胞四十万を、そしてその帰りを一日千秋の思ひで待ち侘ぶ家族の人たちのことを思ひ見るとき、同じ境遇に苦しんだ自らの経験から全く居ても立つてもゐられない気持である。／そうしてまた彼の地ではいろいろなデマが飛び「日本新聞」一流の煽動記事が盛られて同胞の心をいやが上に暗くしてゐること、思ふ。／今度のことではソ連で発行される捕虜のための新聞「日本新聞」で如何に取扱はれてゐるかは手にとるようである、輸送中止で悲観しきつてゐる人々により以上のシヨックを与へてゐることであらう／財閥三井の暴挙とか、反動攻勢とか筆を極めてひとり三井

ばかりでなく日本全体が反動の大嵐の中にあり労働者農民は餓死戦線に追ひ込まれてゐるかに宣伝してゐるだらう、そうして信ずまいとは思ひながら現実に生々しい活字で組まれてゐる以上、信じざるを得ない、日本新聞以外に何も知ることの出来ない悲しさに皆がつかりしてゐるであらう姿が思ひ浮べられる。

とある。ここに登場する『日本新聞』は、敗戦間もない一九四五年九月一五日にソ連国内の日本人抑留者を対象にハバロフスクで発行された日本語新聞である。当初はシベリア抑留者に日本国内の情報を届けることを目的としていたが、一九四六年の後半からは、①スターリンが主導するソ連の政治体制および日本共産党の賛美、②天皇制の支配が残る日本の社会システムの批判、③シベリア抑留者の思想改造——を目論んだプロパガンダ紙へと変貌する。また、この随筆を書いた嵐五郎は、恐らくシベリア抑留から日本への帰還を果たした人物であり、ソ連への強い憎悪を抱えていることがわかる。

だが、ここで重要なのはそうした個人の思想や認識ではなく、シベリア抑留経験者の生々しい言葉で共産主義の恐怖を語ることによって、組合の活動家たちが主導する労働運動も同じ思想に基づいていることを匂わせ、人々の警戒心を促していることである。「財閥三井の暴挙とか、反動攻勢とか筆を極めてひとり三井ばかりでなく日本全体が反動の大嵐の中にあり労働者農民は餓死戦線に追ひ込

まれてゐるかのよう宣伝してゐるだらう」という言葉は、結果として戦前からの権力機構を維持し、「財閥三井」を擁護することにつながってしまうのだが、筆者は恐らくそうした自覚もないまま共産主義的な価値観全体への憎悪を吐露しているのである。そこに編集部がどの程度関わっていたかは不明だが、こうした記事の選択に『大牟田春秋』の基本的な立場が表れていることは間違いない。

より身近な生活問題としては、第一巻第一号に「市場日より大牟田市ヤミ物価」というコーナーがあり、各都市（全国、福岡、大牟田、八幡、小倉、佐賀、鹿児島、宮崎）の食料品流通物価指数対比、9月の大牟田ヤミ物価調べが掲載されている。全国一、〇〇に對して大牟田は一、〇四、福岡や小倉のような都市部よりはやや低いものの、八幡とほぼ同じ水準となっており、必ずしも暮らしやすい地域ではなかったことが分かる。また、記事中には「統制撤廃の見通しは全然つかないが本年の出廻り状況によつて早晩、解かれよう。／『取締り』は依然強化（九月よりは緩和されませう……但し、内緒ですから）されます」といった文言もあり、警察の取り締まりにも警戒している様子がわかる。

4 三井へのまなざし

『大牟田春秋』は総合娯楽雑誌として編集されているため、記事の多くは読者の幅広い娯楽に供することを目的としているが、なか

には当時の大牟田市が置かれていた現状を鋭く分析した論説記事もある。たとえば、第一巻第一号に掲載された、くぬきゆたか「大牟田の市政を動かす者は誰か」には、市議会において教育費として「四十五百万円もの金額が寄付金を財源として編成され、それが市議会を通過してゐる」ことが問題視され、「市当局はこれだけの金額が何処から寄付を募ろうとするのだらうか」という疑問が投げかけられている。興味深いのはそれに続く以下のような記述である。

——もちろん三井関係会社からだらうか。／三井に対する市当局の寄付の要求は、これだけではない。水道問題の解決方法如何によつては六千万円の半額三千万円を三井が持たねばならなくなるだらう。しかも四千五百万円の寄付金中にはすでに、去る十九日市当局が昭和二年度予算による学校建築費として三井関係工場負担となつた二百五十万円が、含まれることになつていたので、この四千五百万円寄付金中から三井会社の分は相当額減じたものとみるべきである。若しかしなら「三井」はこれ以上の寄付から手を引く場合すら予想しておかねばなるまい。とすれば、四千五百万円の殆んどが、一般市民からの寄付といふことになりそうだ。市民一戸当り平均が千円以上に達するが市民は負担できるだらうか、こんな変てこな予算案が無修正で市議会を通過したことを市民はなんと見るだらう。

ここには、三井財閥系企業からの「寄付」に依存した市の体質が明確に示されている。もし「三井」が「寄付」を断つたら市民生活は立ちゆかなくなるだらうという危機感が溢れている。冒頭でも述べたように、大牟田は三井財閥が主導する鉅工業都市として発展した街であり、GHQによる財閥解体が進められた戦後においても、「企業城下町」の色合いが濃かつたことは否めないが、それにしても、市の予算そのものが三井からの寄付をあてに成り立っているというのは尋常なことではない。記事のタイトルは「大牟田の市政を動かす者は誰か」という疑問形になっているが、それが誰であるかはいふまでもないというのがこの記事の基本的なスタンスである。

同様に、この記事では一九四八年九月に行われた県議会議員補欠選挙の結果を踏まえた投票動向の分析もなされており、「所謂保守党とみられる、民主、民自、無所属の得票が約三万票、社会党が一萬二千票、共産党並にそれに近い無所属票が合計五千六百票とみてよい。しかるに、市会の労働者側とみられる数は市会の過半数を占めているにも拘らず上記の如く選挙民は意志表示したのである。これは当市の労働階級もさほどに左傾してないことを示すのだが、その反面、市政においても、プロ階級からの批判が強くないと云ふことを示している」とある。こうした記事の端々から浮かびあがるのは、やはり労働組合が必要以上に力をつけ、市政に強い影響力をもつことへの懸念と牽制である。『大牟田春秋』は明らかに反革新、反労働組合のメディアなのである。

当時の大牟田市民にとって「三井」という言葉は、市の財政の鍵を握る大企業であると同時に組合が要求を突きつける相手でもあったわけだが、全号を通じて戦後の三井鉱山（三池鉱山は三池鉱業所、三池製錬所、三池製作所、三池港務所からなる。その他にも大牟田には関連会社として三井化学工業、三池合成工業など多くのグループ会社があった）に言及した記事は極めて少ない。たとえば、第一巻第二号には山井鑛三「三池鉱業所 三井本社今昔物語り〔上〕」が掲載されている（『大牟田春秋』の休刊にともなって〔下〕は未掲載となった）が、こちらは明治大正期の歴史を振り返ったところで記述が終っている。第二巻第一号の口絵「新春のスナップ 名士の令嬢（その一）三井合成常務取締役 中込閔氏令嬢 慶子様横顔」、第二巻第二号の口絵「名士の令嬢【その二】三井染料工業所長 大坪昌治氏令嬢 大坪久美子様」、同号のコラム「職場の花 原みちえさん（三井合成調査課勤務）」、「職場の花 山本小夜子さん（二十二歳 三池鉱業所生活物資課勤務）」など、『大牟田春秋』はしばしば三井関連会社の女性社員に注目し、写真とともに「職場の花」として紹介しているが、いずれも優良企業としての「三井」を前景化するものである。また、第二巻第一号には特別記者・葵六郎による「製作所合唱団全国大会出場随記」が掲載され、西部連盟の大会で優勝して全国大会に出場した三池製作所混成合唱団の活躍が紹介されているが、こちらも文化団体としての側面だけが切り取られている。戦後の大牟田は、三池炭鉱をはじめとする炭鉱労働組合の結成に

沸き、ストライキをはじめとする闘争が活発となっていた。実際、当時の労働組合の状況を略年譜にしてみると、

一九四五年二月六日／三川鉱労働組合結成、一九四六年一月四日／各坑所労働組合結成、同年二月三日／三池炭鉱労働組合結成、同年二月八日／職組結成、同年五月一九日／西鉱連結成、一二月八日／三池製作所が労組を結成し三池労組の一支部となる、一九四七年一月一日／日本炭鉱労働組合同盟（炭労）結成、同年一月三日／日本炭鉱労働組合同盟結成大会、一九四九年三月一日／三鉱連結成、同年七月二日／会社人員整理基準発表、同年七月三日／三鉱連が人員整理問題仮調印、一九五〇年四月一日／炭労単一結成大会、同年七月一日／日本労働組合総評議会（総評）結成、同年九月二六日／大牟田地方労働組合評議会結成、三池労組参加。職組は一〇月一日加入、同年一月八日／三井鉱山希望退職者募集申入れ、一月二五日 希望退職協定成立、三井全山で七、七〇〇名をこえる

となつてゐる。当然のことながら、この時期の大牟田にあつて労働組合の動きや労使交渉の成り行きは重要な案件だつたと思われる。少なくとも市民にとって、それは自分たちの生活を左右する重要な関心事だつたはずである。にもかかわらず、『大牟田春秋』は企業

側と労働組合の交渉のなりゆきはもちろん、組合の活動やそれに関連する動向についてまったく記事にしていない。三池炭鉱の実態についてはむしろタブー視されている印象さえある。

そうしたなか、唯一、この問題に関連すると思われるのが、第一巻第一号に掲載された溝口記「あの頃のストライキ」▽：大正八年夏に起つたストライキ：△ 突如！万田坑暴動化すⅡ三池全山も一斉ストに突入Ⅱ」である。この記事では採炭労働者が三池の社宅を襲撃する様子が、

——こんな時につきもの、流言蜚語もまた相当なもので社宅全滅、社員みなごろしなど相当ひどいものがあつた、翌日はそれでも平常通り学校に出たが、その時のみじめなこと、全校生徒から「社宅のもん」と云つて白眼視され、「お前たちの親爺のやり方が悪かけんたい、あんまり賄賂ばかりとるけんたい」と寄つてたかつてこづき廻され、まるで罪人あつかいを受けたが、心配になるので授業もそこ／＼に家に帰つて見ると幸ひ焼けるどころか全然暴徒の入つたあともないが、今夜は焼討ちがあるから家財道具持てるだけ持つて避難せよとのこと然かも暴徒は後の万田山にたてこもつてゐるといよく、物騒な情報の中を家の横を何十人となく珠数つなぎで引つぱつて行かれるし軍隊の応援を得て力強くなつた警察隊は片つばしから検挙して来るらしく、その検挙方法は前夜売勘定（購買組合）を襲ひ酒シヨウ

チユウをあふつてあばれ廻つてゐる連中の背後からヤレヤレといひ乍ら印をつけて歩きそれを目印に引つぱつたり納屋でヒル寝してゐる連中を貴様は昨夜あばれたからつかれて寝とるんだらうと引つぱつて来たりしたといふが今時考へられそうもない事である。

と描写されており、採炭労働者と社宅住民の根深い対立のみならず、警察隊が軍隊の力を借りて暴動を鎮圧する様子が告発されている。その論調は明らかに採炭労働者たちの暴徒化を非難するものであり、『大牟田春秋』はここでも過熱化した労働運動を危険なものとして表象し、平和と安全を願う一般市民（この記事では三井の社宅に住む社員家族に限定されているが）が脅かされていた時代を負の歴史として綴る姿勢を見せているのである。

一方、労働者の結集を呼びかける組合に対して『大牟田春秋』はしばしば辛辣な言葉を浴びせる。たとえば、第一巻第一号には「骸炭部・スト突入 三池染料の巻Ⅱたつた一日のストで損害500万円Ⅱ」という記事があり、「染料のストライキといへば、大牟田市民は『あゝまたか。』といふ程度しか感じてゐない」、「（ストライキが続けば）結局は染料、合成は再起不能となり、東洋高壓また莫大な赤字会社となつてしまふだらうし、かくて数万の従業員とその家族は路頭に迷ひ、日本の復興は少なくとも十年おくれる事にならう」

といった議論が展開されている。記事の後半では、「組合側も骸炭爐がこわれてしまふまでは頑張るつもりはなかつたらうが若しあの時面子を立て、呉れるものがなかつたらひよつとしたらトコトンまで行つてしまつたかも知れない。幸ひ組合幹部が占領下にある事をよく認識したからであらうが然し二度と骸炭部のストは出来まい」、「今回の賃金闘争は大体会社案を呑む事でおさまること、思ふ。はつきりいへば組合のマケといふべきであらう」という認識が示され、ストライキに依存する組合の闘争方針そのものが批判されている。労働組合は組合員の生活向上のためあるのだから、企業にも組合員にも過剰な負荷をかけるストライキ戦術は好ましくないということである。こうした書き方を見る限り、『大牟田春秋』が企業側に立ち、ストライキを主導する労働組合と組合員のあいだに亀裂をもたらし議論を展開していることは明らかであろう。

また、この記事でもうひとつ重要なのは、さりげなくではあるが「組合幹部が占領下にある事をよく認識したから」という一節が添えられていることである。すでに指摘したように、『大牟田春秋』は全号に互つてGHQの検閲を受けており、占領政策に関する言及はタブーとなつていた。当然、大牟田における労働組合の動きやストライキ騒動の鎮圧を「占領下」という文脈で議論することはできない。逆にいえば、この言葉にはそうした微妙な問題を顕わにするだけの力があるということである。

ちなみに、『大牟田春秋』ではもうひとつGHQの占領に直接言

及した事例がある。それは福井淳夫「クリスマスの頃」（第一巻第三号）という随筆である。ここで福井は、

終戦の年の冬、三池鋳業所で、大牟田駐在の占領軍の人達と交歓の意味でクリスマス祝会を催す事となり、私とその設計に當つた。／山の上クラブの一室に、クリスマス・ツリーを立て、付近にもそれにふさわしいデコレーションを施したが、当時は極端な物資難で気の利いた裝飾材料も乏しく、代用品だらけで間に合わせたのであつた。（中略）あの頃の進駐軍たちは、もう全部本国へ引揚げてしまつて居る訳であるが、あの人達も、クリスマス・シーズンになれば、あの時の大牟田での祝会の思い出を、新にする事もあるかもしれない。

と回顧したうえで、「ヤミばかりで、殺人や強盗など百鬼夜行の暗く恐ろしい日本に、真のクリスマスを持ち来すためには、一体どうしたらよいのであろう」「クリスマスの外形ばかり真似するに止まらないで、キリスト教そのものに触れてみようとする人が、もつと出て来てもよい筈ではあるまいか」と結びんでいる。クリスマスに擬えて、「キリスト教」の精神をもつて日本を立て直した「占領軍の人達」に感謝している。進駐軍が引揚げたあとの日本を憂い、まるで占領の継続を望んでいるかのような書きぶりである。一九四八年から一九四九年にかけて、徐々に占領が解かれていく気配を感じ

ていた日本人のなかには、むしろ、占領が解かれて「極端な物資難」が進行することを懼れる人々が少なからずいたということである。

労働組合に対しての警戒心は、第二巻第二号に登場した大蔵政務次官・荒木萬壽夫の「随想」にも記されている。文章の最後で「流行のマルキシズム」に言及した荒木は、「日本人の思想的奴隷根性は未だに吾々を支配している」と警告したうえで、

——連合国の管理下にあつて独立国家でない我国の現状を忘れて赤旗を振るなど兎戯に類する、余りに現実的である日本人にはもつと広い視野に立つて世界人になつて欲しいと共に余りに観念的である人達には脚下照顧の余裕を望みたい。／私は『大牟田春秋』が知性の香り高き郷土誌として健かに育ち行かんことを念ずる一人として、本誌がわが大牟田の人のために借り物でない知識と精神の糧となることを祈つて已まない。

と結んでいる。荒木は、第二巻第一号の取材記事「名士を裸にする【其ノ二】選挙を控えた郷土の二人男 大蔵政務次官・荒木萬壽夫、民自党代議士・古賀喜太郎」にも登場する地域の名士であり、発言力は非常に大きかったと思われる。その人物が「連合国の管理下にあつて独立国家でない我国の現状を忘れて赤旗を振るなど兎戯に類する」と主張する文章を掲載する以上、編集部には相応の覚悟や信念があつたはずである。『大牟田春秋』は、政治的な発言を好まず、

深刻な社会問題についても自らの立場を明らかにするような記事を掲載しないメディアだが、労働組合に関してはその例外ということであろう。

こうした労働組合へのバッシングは論説的な記事だけでなく、軟派系のコラムでも実践されている。たとえば、第一巻第一号の「街のうわさ」における「とられるばかり」という記事を読むと、

床屋さんの月々の組合費が二百円で質屋さんの入会金一万円以下各業毎に組合費とか入会金とか毎月毎年相当にある筈であるが如何に使はれてゐるのだらうか。／三池炭鉱の組合費は月収の百分の一乃至一・五といふことで採炭夫など二百円、三百円の組合費を払つてゐるものザラだらう、だが今度三権分立で緩員は殖える。／組合会議も多くなる、会議出席手当の支出は多くなるので組合財政の赤信号も目前に見えてあるといふがこれまた組合員にとつては頭痛の種だらう。ところがまた寄付攻勢も侮りがたい、運動会、PTA、学校修理費などの細かいところから四千五百万円の大口が控えて御座る、税金も太いが寄付も太い、そうして収支決算の明かにされるのは少い。

とある。最後に添えられた「収支決算の明かにされるのは少い」という表現からもわかるように、この記事は明らかに組合に対する不信感を煽るものになっている。組合費や寄付の負担が重いこと、組

合員から集めた組合費の用途が不透明であることなどが綴られることで、組合活動に参加していた多くの読者は不安を強いられたものと思われる。もちろん、だからといって労働組合を否定したり組合員になることを踏み止まらせたりするような内容ではないが、三井側との闘争の気運を削ぎ、結集力を弱める効果は少なからずあったと思われる。

また、第二巻第一号には、「東京から大牟田まで、汽車に揺られること約四十時間」をかけて大牟田を訪れた徳川夢聲が「日なが哉」という随筆を書いているが、そのなかには、

ドブ川の黒光りする泥を、頻りに掬い上げて、道端に積み流してゐる人たちがゐた。／「あれはですね、燃料になるんですよ」と、会社の人が説明してくれた。流石に、石炭の町だわいと恐縮した。／間もなく自動車は工場街に入る。恐ろしく大きな建築物が、軒を接して並んでいる。私は外国映画の場面を連想した。／——こゝのストライキは凄い光景だろう。／など、下らないことまで考える。／会場には、幾千人とも分らない工員諸君が、割れ返るように入つてゐる。

という一節があり、「幾千人とも分らない工員」たちが群れをなしてストライキに臨んだら「凄い光景だろう」という印象が語られている。これは東京から来た徳川夢聲が漏らした個人的な感想という

体裁にはなっているが、その背後には群衆の力が誇示されることに対する市民の不安という問題が横たわっているように感じられる。

『大牟田春秋』において、多くの座談会企画があることはすでに書いたが、三井との関連でいうと、第二巻第二号に掲載された「新薬を語る―座談会―」が興味深い。この座談会では、三井染料工業所の関係者を招いてアスピリンやベニシリンといった新しい薬の生産状況や新薬の開発についての説明と議論がなされている。当時、三井染料工業所は日本国内のアスピリン全生産量の七割を生産していたということで、関係者の口調は意気軒高である。なかでも注目したいのは、販売課長による以下のような発言である。

義江 統制品は統制機構に依つて出さなければならぬのだが、私の方はメーカーであり中央販売業者の資格をもつていて地方販売業者とも結びついているのです。その外の統制品でないものは自由です。で特に大牟田の薬局が積極的に働きかけて呉れるという事は非常に嬉しい事ですが、まだその気運に到達していない様だし、私の方でもまた医薬品界には終戦後急速に進出して日が浅く手が届かないわけです。

ここでは二つのことが問題になっている。ひとつは、統制経済のもとでいかに多くの人たちに薬を届けるかという課題であり、そのためには中央と地方それぞれの販売業者、地域の薬局の働きかけが

重要だと指摘されている。また、もうひとつは、同じ葉でも統制品と非統制品があるのだから、それぞれをうまく組み合わせることで効率よく葉を流通させることができるという指摘である。大牟田における「三井」といえば三池炭鉱のイメージが強烈だが、実際には、大牟田を多方面にわたる諸企業を支配下に置くコンツェルンの拠点であったことがわかる。

5 娯楽と芸能

第一巻第一号の「街のうわさ」には「芸者ガール黄金時代」という見出しとともに、「大牟田のゲイシャガールも、三十人を突破したげな、誰があげるのやら知らんが、兎角若いところでは、一ヶ月三万円からの収入になるといふ、然し小かつ、小つたのおばさん連中は月に五、六本（一本百円）ぐらいのさびしさといふ、あ、遂に芸は身を助けずか」とあり、若さを売り物にする「ゲイシャガール」が幅を利かせるようになって、本来の芸者たちが仕事を失いつつある状況が記されている。また、第一巻第一号の「街のうわさ」には、「やくざ芝居やチャンバラ無声映画が受けてゐる中は大牟田市は低能都市だ、亦之等は封建的な親分子分の社会を温存するに役立つ以外何の益もない」、「労組の指導者諸君、赤旗を振り廻すのも結構だが、組合員諸君の文化的教養を高める為の積極的な運動や指導も忘れない様にして欲しい」とあり、ここでも組合の指導者に対する皮

肉が述べられている。

娯楽に関する記事で特に目をひくのは、第一巻第一号から毎号掲載された「新映画誌上封切」である。当時、大牟田には太陽館、国際、大天地、中座、有楽館、金映などの映画館があり、それぞれが封切作品を競っていたが、『大牟田春秋』の場合は一般的な雑誌にみられる広告ではなく、映画作品の内容を読物として紹介している点に特徴がある。その代表が第一巻第一号に掲載された「サザエさん」（マキノ映画、一九四八年一月〜二月）である。長谷川町子の原作漫画をもとに、監督・荒井良平、脚本・京都伸夫のコンビが東屋トンを主演に撮ったミュージカル仕立ての「サザエさん」は、ラジオのど自慢大会、未復員の夫を待ち続ける人妻、サザエさんの就職、そして、新聞広告で見つけた裸体モデルのアルバイトなど、戦後の世相を反映したエピソードが随所に散りばめられており、さぞ読者の好奇心を誘発したことだろう。

娯楽関係でもうひとつ紹介したいのは第一巻第一号の「うわさ話金千代ダンスホール」（記事のタイトルは「うわさ話フロリダダンスホール」）である。「中座映画劇場の社長田中氏とのお隣のパチンコ屋の大將江崎氏との共同経営で銀座通りこと大正町太陽館裏に生まれた『フロリダダンス教習所』（という店名のキャバレー）を舞台に、「No.1白垣英子さん」「フロリダ」のメイ子ちゃん」「ダンスの転勤噂」「ダンスの苦情」「オールナイト」「停電ダンスホール」といった見出しでキャバレーの生態を描いた記者は、最後に「大

【図2】



牟田にそこはかと笄生した仮設舞踊場の中で時々故意に停電するところがあるさうな、節電でない証拠に音楽に合せてパチツと暫し停電するげな、その闇のスリルに曳かれて殺到する紳士淑女が多かげな、これも一つのホールのバリエーになつてゐるのかも知れないが、余り感心したものでないと、これはもつぱらお母さん達の噂」といふ解説でオチをつけている。

『大牟田春秋』の芸能記事で特に注目したいのは、第二巻第一号

の「世紀の唄姫 山口淑子と一問一答」彼女が日本人でした」といふインタビュ記事である。舞台公演のため大牟田を訪れた山口淑子の楽屋に入り、一問一答式のインタビュを許された記者は、彼女の口から中国の奉天ではじめて舞台に立ったときのこと、戦後、引き揚げたあと三浦環に師事して芸を磨いたことなどを聞き出すとともに、趣味、美容法、好物、ファッション、そして家族や郷里のことまで質問し、屈託のない言葉の応酬をしている。だが、注目したいのはこの記事の冒頭部分、戦前戦中と中国において「李香蘭」として活躍していた時代の証言について、内容を読むことができないように墨塗りがなされていることである（図2）。この墨塗りが、GHQの指示によつてすべての雑誌現物に施された措置なのか、それともこの雑誌を手に入れた読者が個人的に施したものなのかを判断するためには同号の現物をもう一冊手に入れる必要があり、現段階では判断することができないが、いづれにしても李香蘭時代の山口淑子に関しては活字にすること自体に差し障りがあったのであらうと考えられる。

第一巻第二号には山門記者「鳴くな小鳩よでおなじみの岡晴夫訪問記」があり、岡晴夫のインタビュ記事が寄稿されている。日々を巡業で過ごす岡は、「現在月給だけでバンドスターが三万円、その外の座員も一万八千円から三万円はとつてありますのでこれだけでも大変なんです、皆なの生活を保証する責任がありますので。楽園ニユースターだけでも八名、歌手を含めて十三名の大世帯でし

よう。実際やり切れない程です。三十万は必要でせう」などと語り、芸能生活の舞台裏を明らかにしている。その他、第二巻第一号には、かつて映画ロケで大牟田に滞在したことがある高峰秀子と、大牟田出身の藤田進が新年の挨拶を寄せているほか、同じく大牟田出身のバレリーナ・貝谷八百子の訪問記もある。第二巻第二号にはインタビュー「炭都の皆さまへ 一番欲しいものは時間です『大牟田春秋』の質問に答えて 東京にて・若山セツコ」、H記者による岸井明、森川信の楽屋訪問「デブちゃんとかちちゃんのかくらコンビ」が掲載されているし、「続肉体の門 空気座一行ふた、び来演 四月四日太陽館で昼夜二回」という広告記事もある。かつて炭都として栄えた大牟田は劇場や映画館も比較的多かったため芸能界との強い結びつきがあり、その縁故で記者が様々な芸能人の取材に赴いたということであろうし、舞台公演においても大牟田が重要な巡業地だったということであろう。

最終号の第二巻第三号にも「或る日のエノケン訪問記」(H記者)が掲載されている。記者に気を許したエノケンは、「ボクはねえ、毎月の純収入を三等分しているんでねえ、女房とセガレとボクとねそれをどんなに使うと勝手なんでねえ」「僕は出不精でねエ」と自らのプライベートを語っているが、それを受けた記者は、その印象を「動物と家庭との間に幸福に浸つて芸道に精進する喜劇王、エノケンの生活の一断面はどうヒイキ目に見てもプラスだ。／苦勞性に生れた榎本健一を今日のエノケンにさしたのは、彼の撓まぬ精進

と天才的な天分もあらうがこの家庭の功績も高く評価して然るべきぢやないかと思いつ、四方山談義に移つた」と締め括っている。

座談会企画としては、「松屋百貨店に働く女ばかりの座談会」(第一巻第二号)、「昔の大牟田を語る座談会」(第二巻第一号)、「アマリカとインド 女性の生活と結婚」と題して、三池貿易協会の「玉置葉次郎氏を囲む座談会」が開催されている。いずれもサン・タイムス社が伝手をたどつて地域の特徴や世相を語ってもらう内容だが、そのなかで特に興味深いのは、やはり芸者の三駒さんをゲストに迎えた「昔の大牟田を語る座談会」である。話題は「昔の大牟田風景」「飲料水の問題」「三井本社の話」「名士たち」「映画と芝居」「花柳界の話」「お祭のことども」「名物」と移っていくが、たとえば、

抜天「その炭礦ぶし」といふのは此頃流行の炭礦ぶしとは違ふのでせう？」

三駒「さうですたい、この炭礦ぶしは／三池七山、山から出るはヨイヤサキタサ／国の宝だヤーレハ黒ダイヤ掘り出せ／……といふので其の他、まだありますがこの唄は三井本社のさつき話の出た久留(貞次郎)さん達を中心になつておつくりになつたものです、(再び、低い声で)／万田炭礦の、姉さんかぶり／指に輝く黒ダイヤ洒落とる／／卸し底まで春風吹いて、唄が炭掘る宮の浦／掘り出せ、掘り出せ／東洋第一四山堅坑、地下は我等のバラダイス、ア、ア、ア、ノンキぢや／」

鐵腸「今、はやつてゐる炭坑^{マツ}ぶしはあれは筑後伊田の炭礦ぶしで何時の間にかそのリズムが時流にうけられ大牟田にも入つて来たものです、今では全国的にその踊りとともに有名になつて来ました。三駒さんの炭礦ぶしは三味の糸にのせる炭礦ぶしとして是非今一度復興したいものですね」

拔天「三駒さんが東京から飛行機で大刀洗まで飛んで来たのも炭礦ぶしを吹きこんだ前後の事ぢやなかつたですか」

鐵腸「さう／＼さういふことがありますね。其の頃は旅客機に乗ると新聞の記事の中に「空中往来」といふ見出しで一々麗々しく住所職業氏名が載せられたものです、三駒さんは大牟田女性としては最初の空旅客で当時大牟田の話題を一人でさらつたものでしたね

といった軽妙な遣り取りで貴重な話題が提供されている。

もうひとつ、大牟田という地域の特性が伝わる記事としては、「街のうわさ」(第一巻第三号)の「エロ本売れず大牟田で売れる本は?」という記事が興味深い。当時、巷ではカストリ雑誌をはじめとする通俗的な読物雑誌がブームとなつていた。もちろん、大牟田でも当初はそうした雑誌がよく売れた。だが、ある時期から「エロ雑誌」が姿を消し、婦人雑誌や言論雑誌がよく売れるようになった。筆者はその経緯を、

他都市の人から馬鹿にされた様に大牟田はエロ本の弗箱とまでうわさされた、狂艶、だんらん其他のエロ本も追放に依り姿を消し、火の消えた如く売れ行きが低下したのは事実であろう。一時エロ本全盛時代の太牟田で最もよく売れたエロ本は左記の通り。狂艶、だんらん(現在ミスニッポンと改題販売中)、りべらる、ナンバーワン、裏の裏、猟奇エロ本哀徴の後を引き継いで今こそ全盛時代を基^{マツ}いてゐるのは婦人雑誌であらう。大牟田で最もよく売れ、最もよく喜ばれる婦人雑誌は?／＼婦人世界、婦人生活、家庭生活、主婦の友、婦人倶楽部、スタイル、美貌、婦人画報、婦人の友、ホームであらう。綜合誌ではリダーズが圧倒的でダイジストと名がつけば案外売れるのは皮肉だ。世界、展望、人間は勿論よく、労働評論が売れるのは街の特殊性をよく現してゐる。

と語り、『労働評論』がよく売れるところに「街の特殊性」があると述べている。それは、もちろん労働組合の活動が活発であることの証左なわけだが、それと同時に記者が訴えたいのは、大牟田が決して世間がイメージしているような労働者の街ではないということではないだろうか。婦人雑誌もよく売れるし、『世界』『展望』『人間』『労働評論』の読者も数多くいると訴えることで、街の知的水準が高いといいたかつたのではないだろうか。

6 読物とゴシップ

戦後占領期に全国各地で発行された総合雑誌の多くがそうであるように、『大牟田春秋』の読物も地域の成り立ちに多くの誌面を割いている。また、地元企業や商店との結びつきも深く、記事のなかには具体的な団体や店名が頻出する。たとえば、同誌は第一巻第一号から「屋号由来」という企画を立て、古くから大牟田の街に根を張って商売を続けてきた老舗の歴史を紹介しているが、このコーナーは雑誌の性格を考えるうえで極めて重要な役割を果たしていると考えられる。

ここに取り上げられる企業や商店の多くは『大牟田春秋』の誌面に広告を出すスポンサーであり、サン・タイムス社の経営を支えるうえで互恵的な関係を維持する必要があると思われる。だが、それと同時に重要なのは、それぞれの商店の歴史を浮かびあがらせることで商都としての大牟田をアピールする意図があったのではないかということである。実際「屋号由来」を読んでもみると、幕藩体制の時代に遡って地域の特性やそこで活躍した人物が見えてくる仕掛けになっており、大牟田における文化の裾野を広げる内容になっている。また、それを読んだ読者もまた老舗の価値を再認識し、新たな消費行動に出たであろうから、雑誌メディアとしては大きな成果につながったはずである。

もうひとつ、同系の記事としては、記者の取材による「探訪競走」というコーナーがあり、「栄町商店街の御商人様」（第一巻第二号）、「おののくトンネル市場 銀座商店街の巻」（第一巻第三号）、「大物ぞろいの有明商店街 喫茶たいふく」（第二巻第一号）などの特集が組まれている。タイトルは異なるものの、「家事審判所のぞき」（第一巻第一号）、「おしやれ学校 香蘭洋裁学校を尋ねて」（第一巻第二号）、「紅燈街 ベにすすめ、従業員、新築開店雀の宿、芸者、純情なお化け商人、ソレは余りな、おでん 都、ちようちん持、天狗の「天月」、心中ゼンサイ中村屋」（第一巻第三号）、「銀行めぐり 福銀五月橋支店の巻」（第二巻第二号）、「銀行めぐり 肥後無盡の巻」（第二巻第三号）といった記事が毎号のように掲載されている。その意味で、『大牟田春秋』は地域密着型のミニコミ雑誌的な性格をもっていたことがわかる。個々の書き手による言論を展開したり、政治や権力の在り方を批判したりするメディアではなく、身近な情報を提供して地域の活性化に貢献していこうとする意図をもった雑誌だったことがわかる。

読物の中心はやはり小説（実話小説、ノンフィクションも含む）である。同誌には、第一巻第一号の古町春夫「ラブレター」若き日の追憶Ⅱ」、蓮尾進「愛撫」以降、貫怒川妙司「波頭」（第一巻第二号）第二巻第三号まで連載）、邦枝完二「女牢夜話」（第二巻第一号）、永松浅造「事実小説地殻を破りて」（第二巻第二号）、永松浅造「実話小説長州沖の海賊船」（第二巻第三号）、志村喬「ニュースストー

リー人妻の後追い心中」(同)、山本房雄「実話 情慾の結婚(其の一) 真夏の夜の巻」(同)がある。連載小説を書いた貴怒川妙司をはじめ、ほとんどは地元の無名な書き手だが、唯一の例外は、官能的な時代風俗小説を得意とした邦枝完二が「女牢夜話」という作品を提供していることである。慶應義塾在学中から永井荷風に師事し、『三田文学』の編集に携わったあと、時事新報の記者を経て帝国劇場文芸部に入り、劇作家兼小説家として活躍した邦枝完二と大牟田のつながりは特にないと思われるが、『大牟田春秋』には徳川無声をはじめ中央の文壇、劇壇とつながりのある人々も寄稿しているため、そうした伝手をたどって原稿を依頼したのではないかと推察される。なお、第一巻第一号から最終号まで続くコーナーとしては剣刀抜刀による「方言漫談」があり、大牟田方言をもとに地域の文化や風俗が軽妙な語り口で紹介されている。

これまで度々言及してきた「街のうわさ」には、芸者ガール黄金時代、とられるばかり、眠れる倉庫、売れぬ商店街、街の発明王、真砂は尽きず(第一巻第一号)、戯れに恋はすまじ、S橋際派出所、出現しない夜の花、人生はカメラから、ラヂオ 月掛販売、声の主は、食べものある記、理髪屋、これは失礼、罪なき衆生、「フロリダの助教様」、大牟田春秋、こんな男に誰がした、金計算に興味ありや(第一巻第二号)などの記事が並び、市民に向けた身近な話題が広く集められている。

その他、詩、俳句、短歌、川柳も少なからずあるが、読者からの

投稿などは求めておらず、コーナーとしても定着していない。マンガに関しては、炭都マンガクラブ同人の協力で毎号のように四コマものや風刺画が掲載されているが、こちらも優れた作品は見当たらず、埋め草的な要素が強い。これまで紹介したものの以外で著名人が関わる随筆、取材記事としては、徳川夢聲「日なが哉」(第二巻第一号)、含宙軒夢聲(徳川無声)「礦山の奇遇」(第二巻第二号)、H記者「楽屋訪問 デブちゃんとチビちゃんのらくらコンビ 一度のオマンマ たつた四号……岸井明 わしや小さい頃から経済的さ……森川信」(第二巻第二号)がある。

7 結び

以上、戦後占領期に発行された地方総合雑誌のひとつである『大牟田春秋』について、様々な観点から分析を行ったが、そこから見えてきた特徴を以下にまとめる。まず、この雑誌の基本的な立場としては、三池炭鉱をはじめとする労働組合の活動および労働運動の推進を図ろうとする人々の言論を封じ込め、大牟田の街の魅力を発信することを基本方針としていることがわかる。たまたま労働者として大牟田に流れてきた人々ではなく、古くから大牟田に根を張り、大牟田の歴史と文化を大切にしてきた人々に向けた記事が中心を占めている。また、戦後も続いた「三井」の企業城下町としての特性については十分に理解し、炭坑都市からの脱却をめざす各企業の取

り組みを幅広く取材している。

社会記事の多くは市の復興対策や市政の実態に費やされており、発行元であるサン・タイムス社と行政とのあいだに密接なつながりがあったと思われる。取材先は地域の老舗や商店街の名物店が多く、記事に取り上げられる商店が広告主として雑誌の発行を支えている側面もある。つまり、同誌は雑誌の購読料のみで継続できた純粹な商業誌ではなく、地域の商店などから広告を取りそれを紹介する記事掲載するようなミニコミ誌としての性格も有していたということである。

もうひとつ、同誌の記事で特徴的なのは大牟田と所縁のある有名人、芸能公演などで大牟田を訪れた著名人へのインタビューを数多く掲載していることである。こうした著名人への取材をするためには芸能界、興行界とのパイプが必要だと考えられるが、恐らく、サン・タイムス社にはそうしたコネクションがあったのであろうし、戦前から炭鉱地帯として隆盛を誇った大牟田ではそうした芸能公演も多かったということであろう。同誌には毎号のように新作映画の紹介や地元映画館の上映情報が報じられているが、それはつまるところ、大牟田に映画館が数多くあり多くの市民が詰めかけていたことの証左でもある。逆にいえば、『大牟田春秋』は市民に芸能や映画の話題を届けるための情報誌でもあったということである。

大牟田をはじめとする日本の炭坑地帯は、明治期の殖産興業時代を経て戦時下には軍需産業や国策事業の拠点として利用された。外

地からなれば強制的に連れてこられ、過酷な炭坑労働を強いられた人々も数多くいた。だが、敗戦とともに彼らの多くは大牟田を去り、それと入れ替わるようにして国内で仕事や家を失った罹災者、外地からの引揚者が群れ集った。朝鮮戦争の特需によって束の間の繁栄を極めたかと思いきや、一九五三以降のエネルギー転換政策によって相次ぐ閉山と過疎化に悩まされることになる。『大牟田春秋』に登場する人々は、そうした近未来を知る由もなく、ただひたすら空襲で壊滅した街の復興に邁進している。

誌面には、GHQによって財閥解体が進められたあと、それぞれが独自の技術をもって新しい事業を展開しようとしていた「三井」グループの変貌ぶり、企業城下町の体質から脱皮して魅力ある都市づくりを進めようとする行政の施策、そして、古くからの大牟田を愛し、その歴史や伝統を大切に続けようとする商店街の取り組みなどがきめ細かく紹介されている。戦争で無惨に傷つけられた人々を活気づけ、日々の生活に娯楽を与えようとする狙いも鮮明である。

だが、繰り返し述べてきたように、『大牟田春秋』には、当時の大牟田が抱えていたはずの深刻な側面、あるいは、日常的に繰り返らばられていたはずのリアルな光景が決定的に欠落している。炭坑とそれに関連する数多くの企業を経営していた「三井」による搾取の構造や政治との癒着は、戦後の大牟田に生きる人々にとって切実な問題をはらんでいたはずである。炭坑労働者の多くが自らの権利獲得のため組合運動に参加し、労使の対立が深刻なものになっていた

ことは他の史資料によって鮮明にされている。また、過激化する労働運動は、やがて市民との対立を生み、炭坑労働者と一般市民がそれぞれの家族や子どもたちを巻き込みながら亀裂を深めていくことも多かったといわれている。

『大牟田春秋』はそうした肝心なところにいつさい目を向けず、戦後復興というベクトルのみを推し進めようとしている。炭坑労働者に対してはその存在そのものを黙殺し、彼らの活動や主張を意図的に封印しているようにみえるし、当時、炭坑労働を離れて朝鮮半島へと帰還していった数多くの在日朝鮮人に関する言説も皆無である。地元の商店主などの広告料が主な資金源であったため、どうしてもそちら側に肩入れた記事内容になってしまうことは致し方ないにしても、大牟田の街でいままさに起こりつつあること、大牟田の街が抱えている最も深刻な問題を回避し、三井や行政からの受け売り記事、あるいは、身近な伝手を利用しての提灯記事に誌面を提供している点も否めない。

『大牟田春秋』は、戦後占領期における大牟田のありようをリアルに照らし出してくれる雑誌であると同時に、同時代における炭坑都市の現実を正確に表現することの難しさ伝えてくれる雑誌でもある。雑誌は必ずしもそれぞれの時代や状況を正しく反映しないということを顕わにする逆説的なメディアである。『大牟田春秋』はごく短命に終わり、今回の解説を書くための底本となった森医院の所蔵資料やプランゲ文庫の検閲資料を除いてほとんど保存されること

がなかったが、それはある意味で、編集発行に関わった人々、購入した読者たちがこの雑誌に愛着をもっていなかったことの証左なのかもしれない。

注1 一九五九年一二月、石炭鉱業新議会によって石炭産業の本格的な合理化案が答申され、出炭増産、炭価引き下げ、人員整理を求が求められることになった。

注2 炭都クラブ会員は、出雲義雄、中島博信、後藤悦信、岩永潔、村上晃一、浅野昌作、石井稱、植田卯一、赤嶺日出男、池田中嶺、上田孝男、境誠、今村四三二、大石義一、木下正美、原田代輔、大里秋吉、雪野一平、富田渉、小川よしを、上甲米太郎、鳥越文邦、落合良一、下川博省、徳永昌之、安永義輝、土野速見、河野裕通、山本和夫、七條實、樺島克己、松井壽義、森智水、河野徹男、松田正次、高椋竜生、松尾義孝、岳準吾、松村秀一、田代凱紀、藤田敏勝、中田忠男、福井健夫、中村國介、麓茂の各氏である。

注3 以下、音楽会の出演者を明記する。第一回(七月二九日、於・染料講堂) 出演者・鰐淵賢舟。第二回(八月二七日、於・染料講堂) 出演者・篠崎弘嗣、中島方、友谷和子、第三回(一〇月一日、於・染料講堂) 出演者・山田耕筈、仕輝子、鷺見三郎、兼松信子、第四回(開催日、会場は不詳) 出演者・伊藤武雄、伊藤ハナ、野邊知爪丸、第五回(二月三〇日、於・染料講堂) 出演者・横田孝、佐藤博子、第六回(二月七日、於・宮原講堂) 出演者・平岡養一、兼松雅子、第七回(四月一五日、於・宮原講堂) 出演者・巖本真理、野邊知爪丸、第八回(四月二八日、

於・三井工業）出演者・藤原義江、三上孝子、田中園子、第九回（六月一日、昼夜二回、於・三井工業）出演者・齊田愛子、砂原美智子、川島千世。なお、炭都文化クラブの音楽公演は一九四八年頃から三池染料音楽愛好会（三池染料の福祉事業、会員は三染職員、従業員と家族および一般市民）に引継がれ、一九六三年まで継続された。

注4 『緑地帯』同人は、本多道夫、鳥越文邦、大武正人、立屋敷正一、中島立雄、中島康允、永江榮、山本和夫、古賀壽男、雪野一平の各氏である。第一巻第一号の「後記 文学の祈願」には、「信ずるといふことは愛することに外ならない。しかし汝を愛するが故に己を愛せよといふことにはならない。愛さずには居られぬ一途な心だけが愛を創造する。／愛の苦しみも力一杯自らの人生を生き抜くところにある。スタンダールは唯愛することのみに一切を信じた。我々の文学も亦一途な祈願だけしかない。だが生きることが全時に大衆の中に生きることだ。そして作家が何を信ずるかが芸術の生命を左右するのだ。 T・N」とある。

注5 一九四七年創刊。同人（含顧問委員）は樋口種樹、松永雅己、境慧、馬場三郎、園田勇、金子佐一、藤川苔水、矢ヶ部勝次、古賀ミサヲ、長谷津静枝、半田昶子、泉刺花、山本和夫、古賀朔郎、内田博、前川俊光、中尾一夫、澁谷聰磨、村上明、中山亥三生、前川那香、萩尾浩、松本信夫、熊谷梢、延原慶三、花園近代である。

注6 大牟田の新聞、雑誌に関しては、大牟田市史編集委員会編『大牟田市史 補巻』（大牟田市役所、一九六九年五月）の第一三篇「文化・体育」に詳細が記されているが、本稿で紹介した『大

牟田春秋』を含めてタイトル自体が把握されていない雑誌が多い。また、大牟田市立図書館には郷土誌のコーナーがあり、主要雑誌が所蔵されている。

注7 第一次『三池文学』は一九五三年の三池争議で廃刊に追い込まれるが、一九五五年九月に新日本文学会大牟田支部が第二次『三池文学』を創刊した。『Pioneer』（第三号）の編集後記には、「来る十月より『ピオネ』は『FOU』と合併する。詩と小説と評論を中心とする文芸雑誌として新しき飛躍を遂ぐべく目下鋭意準備中であることをつけ加えておく。（Kei Izumi）」とあり、同誌が第三号をもって終刊し「FOU」と合併したことが分かる。

補助資料1 『大牟田春秋』総目次(ジャンル、記事名、執筆者)

第一巻第一号 表紙(大隈健) / 巻頭「大牟田春秋への期待」(小木曾潤) / 目次 / 「名士を裸にするその一」大牟田市市長 田中忠藏とはどんな男か? (藪中虎之助) / 「街のうわさ 誰が出すのか、宣伝時代、相手が悪い、良縁社長」 / 戯歌「春秋おろか歌」(新愚生)、論説「あの頃のストライキ」大正八年夏に起つたストライキ:△突如!万田坑暴動化す 三池全山も一斉ストに突入 (溝口記) / コラム「川柳コント」 / 随筆「随想片々」(古賀ミサヲ)、コラム「骸炭部・スト突入 三池染料の巻」たつた一日のストで損害500万円 / コラム「街のうわさ 芸者ガール黄金時代、とられるばかり」 / 詩「茅屋の歌」(大木淳) / 取材記事「新地アパルトにも秋は来る」(〇ち) / コラム「川柳コント」(土筆) / 小説「ラブレター」若き日の追憶 (古町春夫) / 取材記事「オフィスめぐり お役所訪問 大牟田財務出張所の巻」 / 論説「大牟田の市政を動かす者は誰だ」(くぬきゆたか) / 取材記事「うわさ話しフロリダダンスホール」 / 小説「愛撫」(蓮尾進作 / 大隈画) / コラム「街のうわさ 眠れる倉庫、売れぬ商店街、街の発明王、真砂は尽きず」 / 川柳「春秋柳壇」(岩田土筆) / 取材記事「犯罪都市大牟田 激増する少年犯罪」 / コラム「街のうわさ レコード街」 / 宣伝「本誌の御購読に就て」 / コラム「方言漫談 其の一 石炭とコークス」(剃刀抜刀) / 宣伝「新映画誌上封切 三百六十五夜、千姫御殿、サザエさん、六人の最後の者、わが生涯のかゞやける日、青の恐怖、蜂の巣の子供たち」 / 取材記事「市場だより 大牟田市ヤミ物価」 / 取材記事「家事審判所のぞき」、▽すべて金で解決、▽離婚も同権、▽無口男は女にもてぬ」 / 編輯後記

第一巻第二号 表紙(大隈健) / 口絵「大牟田風物詩(その一) 太陽館」 / 目次 / 取材記事「アベックは愉しくその詳細をお知らせします」アベックは二人だけのもの(山名記者) / 取材記事「鳴くな小鳩よでおなじみの岡晴夫訪問記」 / コラム「方言漫談」しりぶた「べんぶた」(剃刀抜刀) / 川柳(正人、土筆) / コラム「独言」 / 随筆「おしやべり岬」(小松茂) / 座談会「松屋百貨店に働く女ばかりの座談会」(松屋ヨリ 秘書人事課長・吉田基弘、仕入課長・岩田強、松屋のシヨップガール・瀬崎美代子、福山イツエ、小山みどり、島崎八重子、野口絹子、本社より 司会者 副社長・村上悟、編輯長・田中重清、婦人記者・塚川久江、写真撮影・松屋写真部長) / 取材記事「大学生に恋した六人の子を持つ母 情死事件通町」 / 川柳「春秋川柳」(富美子、寿弥) / 宣伝「創刊号 売り切れの御挨拶」(サン・タイムス社員一同) / マンガ「ライターと彼女」(富代ひさし) / 取材記事「探訪競走 栄町商店街の御商人様」(堺記者) / 「春秋川柳」(しかを、飛鳥) / 祝言「祝創刊 大牟田市議会議員」 / 取材記事「おしやれ学校 香蘭洋裁学校を尋ねて」

「新映画誌上封切 幽霊暁に死す」★3日封切:太陽館、王将★3日封切:三川金映、鉄拳紳士★10日封切:中座、死美人事件★10日封切:三川金映、恋愛特急★10日封切:大地、エノケンの爆弾児★27日封切:太陽館、青蛾★松竹大船作品」 / 小説「波頭」(貴怒川妙司作、木村近義画) / コラム「屋号由来 ミカド、サンカクヤ、美乃屋、鳳来軒、静観堂」 / 取材記事「三池鉱業所 三井本社今昔物語り(上)」(山井鑑三) / 宣伝「求婚のしおり」 / 論説「横目で見たミス大牟田(ミス大牟田審査の手帳から)」(山本房雄) / コラム「街のうわさ 戯れに恋はずまじ、S橋際派出所、出現しない夜の花、人生はカメラから、ラヂオ 月掛販売、声の主は、食べ

ものある記、理髪屋、これは失礼、罪なき衆生、「フロリダの助教様」、大牟田経理事務所税移転案内、大牟田春秋、こんな男に誰がした、金計算に興味ありや」／コラム「名士を裸にする(二) 大和興行業社長・鶴惣市」／宣伝「芸能部だより」映画ファンに福音！12月より新発足する「友楽館」／編輯後記／興付

第一巻第三号 表紙(大隈健)／口絵「大牟田風物詩(その二) 松屋」(木村近義)／目次／随筆「クリスマスの頃」(福井淳夫)／コラム「染料の花・原佐日子嬢、染料に咲ける花・野中愛子嬢、三池鉱業所の花・田原・静嬢、市役所の花・木戸美恵子嬢」／論説「名士を裸にする(その二) 大和興業社長鶴惣市とはどんな男か？」(牟田春秋)／コラム「方言漫談【その三】『じー』と『じんべに』」(剃刀拔天)／取材記事「うわさ話 金千代ダンスホール」／取材記事「探訪競走 おのくトシネル市場 銀座商店街の巻」／小説「波頭【第二回】」(貴怒川妙司作／木村近義画)／マンガ「彼女来らず」(山本克己)／宣伝「読者のみなさまへ!! 作家より、ダブちゃんより」／コラム「屋号由来 両国ベニスズメ」／コラム「風流今昔物語」ミカン鈴なりの生花 異変(春秋生)／川柳「春秋柳壇(其一) 土筆編」(高田しかを選)／戯歌「春秋おろか歌」(新愚生)／随筆「正月封切映画の展望」／宣伝「新映画誌上封切 群狼(8日封切・太陽館)、シミキン オオ市民諸君(15日封切・大地)、情熱の人魚(15日封切・三川金映)、小判鮫(五月封切・大牟田太陽館)、灰色の男(1日封切・中座)、我等の生涯の最良の年(15日・28日・二週間続映国際)」／取材記事「街のうわさ カネヒラヤ、敏腕支店長、募集バッチ一円也、エロ雑誌売れず 大牟田で売れる本は?、塵も積れば、今日のうわさ、健康は裸より、ストは電源や

否や、音楽喫茶店」／コラム「紅燈街 ベにすすめ、従業婦、新築開店雀の宿、芸者、純情なお化け商人、ソレは余りな、おでん 都ちようちん持、天狗の「天月」、心中ゼンザイ中村屋」／宣伝「求婚のしをり」／占い「あなたの個性は?」／編輯室だより／興付

第二巻第一号 表紙(大隈健)／口絵「新春のスナツプ 名士の令嬢(その一) 三井合成常務取締役 中込閔氏令嬢 慶子様の横顔」／目次／取材記事「郷土大牟田の生んだバレーの女王 貝谷八百子訪問記」(本誌東京特派記者)／小説「女牢夜話」(邦枝完二作、大隈健画)／コラム「屋号由来 菊水堂カネヒラヤ大福十字屋」／随筆「日なが哉」(徳川夢聲)／挨拶「明けましてお目出たう御座居ます」(高峰秀子)、「郷里の復興を祈りながら」(藤田進)／座談会「昔の大牟田を語る座談会」(山口鐵腸氏、剃刀拔天氏、三駒さん、本誌記者)／随筆「墨汁一滴 渡り鳥」(嵐五郎)／随筆「随想」(荒木萬壽夫)／随筆「片平山」(貝谷八百子)／取材記事「貝谷八百子とバレー団」／取材記事「製作所合唱団全国大会出場随行記」(特別記者・葵六郎)／随筆「三池かるた」(福井淳夫)／宣伝「編集部だより」／取材記事「お役所めぐり 税務署の巻」／マンガ「1949新春漫画の頁初午(矢元克美)、親の心子知らず(大空茂)、年ごしのセツブン(二色七生)、はつ夢(江添時夫)」(炭都マンガクラブ同人合作)／取材記事「世紀の唄姫 山口淑子と一問一答 彼女は日本人でした」／取材記事「名士を裸にする【其ノ二】 選挙を控えた郷土の二人男 大蔵政務次官・荒木萬壽夫、民自党代議士・古賀喜太郎」(風生)／取材記事「銀行めぐり 五月橋帝國銀行の巻」／コラム「方言漫談【その四】『まる』『ちーん』『かーど』」(剃刀拔天)／小説「波頭(第三回)」(貴怒川妙司作、木村近義画)

／取材記事「探訪競走 大物ぞろいの有明商店街 喫茶だいふく」／
宣伝「唄ふエノケン捕物帖、幽霊塔、四人目の処女、悪漢バスコム」
／編集室だより／奥付

第二巻第二号 表紙(大隅健)／口絵「名士の令嬢【その二】三井
染料工業所長 大坪昌治氏令嬢 大坪久美子様」／目次／小説「事実
小説 地殻を破りて」(永松浅造作、木村近義画)／マンガ「人間失
格」(夢物語)「委託加工時代」(新版 養老ノ滝) (はんば三郎)／
コラム「職場の花 原みちえさん(三井合成調査課勤務)」(職場の
花山本小夜子さん(二十二歳、三池鉱業所生活物資課勤務)」／随
筆「礦山の奇遇」(含宙軒夢聲(徳川無聲))／取材記事「銀行めぐ
り 福銀五月橋支店の巻」／随筆「豊分居雑筆それからそれ」(佐々
木邦)、コラム「新釈いろはがるた」(莊野七過夫)／座談会「新葉
を語る―座談会―」(三池染料工業所・平山次長、半田業務課長、
今井早鐘工場長、義江販売課長、土井製品課長、鈴木有機第四課長、
清田有機第四課長代理、鳥居研究部長代理、木谷首席研究員、西原
係長、藤澤係長、松本係員、咩地係員、本社・村上副社長ほか)／
取材記事「郷土の伝統を尋ねて ホッケンギョーと水かぶりその二」
(福井淳夫)／コラム「屋号由来 大空印房たちはなランタン 東京
十字屋」／インタビュー「炭都の皆さまへ 一番欲しいものは時間
です」(大牟田春秋)の質問に答えて 東京にて・若山セツコ)／取材
記事「栗屋訪問 デブちゃんちビちゃんのかくらコンビ 一度のオ
マンマ たつた四号……岸井明 わしや小さい頃から経済的さ……森
川信(日記者)／取材記事「映画館めぐり 中座の巻」(T記者)
／コラム「黄金時代の炭都基界」／俳句「近詠」(岩田土筆)／コ
ラム「放言漫談【その五】 接頭語オンパレード」(剃刀拔天)／コ

ラム「卒業式新様」(XYZ)／座談会「アメリカとインド 女性の
生活と結婚 玉置菜次郎氏を囲む座談会」(三池防疫協会・玉城菜次
郎氏、家事審判所調停委員・古賀みさを夫人、三鉱業物資課・蓮尾
美鈴嬢、同上・山本小夜子嬢、三池製作所・光永恵美子嬢、松屋経
理部長・西村良雄氏、同仕入課長・岩田強氏、本社村上副社長ほか
二名、×月×日、大牟田松屋六階にて)、宣伝「統肉体の門 空気座
一行ふた、び来演 四月四日太陽館で昼夜二回」／コラム「炭都映
画界 改善時代に入る？」／宣伝「新映画誌上封切 結婚三銃士(新
東宝作品)、シベリヤ物語(モス・フィルム作品)、螺旋階段(RK
O作品)、斬られの仙太(森田プロ作品)、静かなる決闘(大映東京
作品)、麗人草(松竹作品)」コンドル(コロンビア作品)、宣伝「大
牟田映画プロ 四月番組 太陽館、国際、大天地、中座、有楽館、金
映」／小説「波頭完結篇」(貴怒川妙司作、木村近義画)／宣伝「本
社主催全九州川柳祭」／奥付

第二巻第三号 表紙(木村近義)／目次／小説「実話小説 長州沖
の海賊船」(永松浅造作、木村近義画)、取材記事「或る日のエノケ
ン訪問記」(日記者)／コラム「街のうわさ」／座談会「大牟田で
始めて公開された産児調整座談会」(△講師九州大学教授衛生学教
室 医学博士・水島治夫、△主催 大牟田保健所、サン・タイムス社、
保健所関係・所長池邊鼎、森、鷹尾、山下、村上、鶴出記者、△出
席者 指定医 後藤春人、東原一夫、桑野實、深川太郎、歳田亨の諸
氏 厚生委員長 市議・米倉勇喜、教育委員長 市議・黒田潔、市教育
課長 市社会教育係長・白仁 PTA聯合会長、古賀調停委員、中島、
寺田、池邊民生委員、田中婦人会長、渡邊直政三井薬局長、堤警務
課長、前田優生保護委員、平木、村島医局衛生課員、吉田三川分院

長、塚本学童福祉社長、藤井、山下、坪井教官、田中、滋賀、中島婦人会代表、草野、古賀葉剱師、園出、鷹尾、上津原産婆、大坪特殊料理屋三川組合代表、坂口中島町代表、森、木下市従組代表、仲西合成労組代表、木下三染代表、その他各新聞記者等諸氏) / アンケート「受胎調節は是非か」 / 論説「産制問題は何故重大か」(水島治夫) / 解説「優生保護の方法」 / 笑話「ホントカシラ?」 / 小説「ニュースストーリー 人妻の後追い心中」(志村喬) / コラム「ウソバナシ 一個四百円也のカステラ饅頭」 / コラム「屋号由来 辰己、三原美容院、一天張、みのり屋」 / コラム「方言漫談【その六】ばさらか、すらごつ、ばんも」(剃刀拔天) / コラム「豊分居雑筆 スポーツの思ひ出」(佐々木邦) / 取材記事「映画館めぐり 友楽館の巻」 / コラム「シネ街道」 / 宣伝「映画物語」 / 論説「郷土の伝統を尋ねて(その三) 初代筑後守ものがたり」(福井淳夫) / 取材記事「銀行めぐり 肥後無盡の巻」 / 取材記事「市会議員三十八人列伝(其の一)」(春秋生) / コラム「街のうわさ アベックの場所 は?、官僚 未だ死せず、えらい事ぢや!!、めめて賞金二万円也、十万円の蜚、市内薬店の避妊薬、クラツカーせんべい、ホールは悪の温床ではない」 / 小説「実話 情慾の結婚(其の一) 真夏の夜の巻」(山本房雄) / 短歌「乙女、母」(孤月子) / 取材記事「柳券番のお姐さん銘々伝」 / 小説「波頭 解決篇」(鬼怒川妙司作、木村近義画) / 「街のうわさ チケットはダンサーの食券、窮すれば通ず、ピヤホール復活、諸行無常、もぐり料理屋続出、野球狂時代、何んとかならぬか、キャンデーの流し売り、親切な佐野歯科」 / 宣伝「文芸欄新設読者文芸募集」(編集部) / 編輯後記 / 奥付

補助資料2 戦後占領期の大牟田

【一九四六年】この年の大牟田の人口一四四、一七七人。大牟田市、新地・中町・亀谷・八尻・右京・若宮に市営住宅建設。二月・三池炭坑鉱員労働組合(いわゆる三池労組) 結成。綱領などを定めた。のちに参議院副議長となった阿具根登氏が初代組合長。三月一日・西鉄栄町―大牟田間、復旧。三月二〇日・三川小売市場開設。四月二日・田畑守吉元大牟田商工会議所会頭死去。六〇歳。七月・三池合成成立。三池労組六三日スト。九月一四日・四つ山坑で事故。二名死亡。【一九四七年】 三月二九日・世界労働組合連盟書記長ルイ・サイヤン氏ほか、九州三池炭鉱・東洋高压を訪問視察。四月一日・白川国民学校設立。また学制改定にともない新制中学が設立される。第一(右京) 第二(松原) 第三(米生) 第四(勝立) 第五(歴木) 第六(橘) の六校。私立明光学園創設。六月三〇日・米国タイム誌で大牟田にあった福岡捕虜収容所三池分所ことが報じられる。捕虜間の内紛で告訴。九月六日・映画館「太陽館」創業者・林田瀧十郎氏死去。一〇月九日・衆議院で大牟田市四箇峠改修工事施行に関する請願が審議された。一〇月二三日・大牟田体育協会結成。十一月一日・銀水・三池・駛馬・玉川に出張所(一九五〇年から支所) が設立される。【一九四八年】 四月・平原小創設。第七中学校(船津中) 第八(白光) 第九(甘木)、設立。大牟田高等女学校、大牟田北高校となる(翌年現在の甘木山に移転)。四月九日・三井三池染料工業所内での映画上映中に工員が盗んだ硝化綿布(ニトロ・セルロース) で作ったズボン下にタバコの火が引火して爆発し一四人負傷。六月九日にこの工員の義父がこのズボン下を履いていてタバコの火が引火して自宅で焼死したことから六月になって事件が発覚。八月・三井山の上病院、天領町に病棟設立(現・大牟田天領病院)。九月・宮浦坑で落盤事故。五名死亡。九月二三日・蓮

尾医院創業者・蓮尾春甫氏死去。【一九四九年】大牟田市営競馬条例制定（内容不明）。吉野に市営住宅建設（白銀）。四月一日・大牟田市立図書館設立。五月二十九日・昭和天皇、大牟田を巡幸。三川坑・現在の三井化学・中友小・大牟田市役所ほかを視察。一〇月・戦後初の市内日刊紙：大牟田日日新聞創刊（のちに大牟田毎日新聞と改名）。人工島・初島の建設工事が始まる。二月・大牟田市の定数条例改正により四二名解雇。一二月・参議院通商産業委員会の議員が大牟田の鉱害を視察した。一二月二六日・賢木村（現・南関町上長田など）のひとが肥汲みにきて七浦小学校前においていたメス牛を奪った男が西米生の精肉店に売却しようとして逮捕。【一九五〇年】勝立・宮浦鉱統合。人口一九一、九七八人、一月五日・三川球場で二月から訓練中だった東大野球部が帰京前に四つ山チームと試合。一月六日・市役所の人事異動で金子正恵建設課長が係長に格下げ。職員三〇数名が人員整理で解雇。一月・三池高校生徒会が生徒心得を作成。一月八日・全国実業団ラグビー大会（現・全国社会人ラグビー大会 第五回から）で優勝した三井化学チームが大牟田に戻る。一月一〇日・高瀬文部大臣（高瀬荘太郎）、矢野西雄厚生政務次官（妻は徳田球一の妹・克子。参議院議員）大牟田に来る。矢野次官が二五年度中に銀水園を完成させると語る。一月一三日・團伊能（團琢磨の長男、團伊玖磨の父）参議院議員、選挙応援のため来る。一・一八日・田中大牟田市長が大牟田駅での通勤通学混雑改善のため高瀬（現・玉名駅）―鳥栖間にガソリンカーを運航してほしいと門司鉄道局に陳情。一月二〇日・共同通信主催の「終戦前後の大記録展」が松屋にて開始。三〇日まで四階で。昭和天皇の大牟田巡幸時の御使用品を展示。一月二六日・日雇い労働者組合結成。一月三〇日・三池高校二年生数名が三年生を暴行。三年生の

MM君は「なまいきだ」MH君は「平素女生徒たちと親しすぎる」と暴行される。首謀者一名は退学。一月三十一日・荒尾市議二名が飲酒しており、警官と口論となり暴行。寺田佐平荒尾市長も書類送検。二月八日・寺田荒尾市長、国会に公述人として出席。二月十五日・大牟田北高校野球部・ソフトボール後援会設立。会長は森清氏。二月二〇日・荒尾署の刑事が荒尾市内で窃盗容疑で逮捕した容疑者が西原区ガード下で逃走を図ったため発砲。右首に命中し危篤。二月二一日・一月以来空席だった収入役に猿渡税務課長が就任。二月二五日・教楽木―大牟田駅間の西鉄バス路線が九年ぶりに復活。片道二五円。二月二五日・大牟田市、引揚者住宅申請書を福岡県に送付。健老町、橋、三池新町の三箇所。一〇〇世帯四五〇人が優先入居へ。二月二八日・小川清六大牟田市議会総務委員長が脳溢血で死去。もと大牟田市役所課長。三月三日・大牟田商工会議所会頭が大牟田ガス社長・大天地館主の小川力平氏が就任。三月九日・工食用・工場内金属窃盗を行った九名の金属窃盗団が逮捕。三月七日・豪雨のため大牟田線が下り線倉永で折返し運転。同日復旧。倉永駅南で土砂崩れ。三月一三日・太陽館で文楽浄瑠璃の公演が行われる。三月一四日・国会に「大牟田駅、三池港間に臨港鉄道敷設の請願」が出る（成立せず）。三月二四日・商工会議所小川会頭が三井鉱山やまかわ社長に資材部福岡移転（一〇月）の撤回を要望。三月二五日・三池染料労組委員長に細谷治嘉県議就任。三月二九日・三川球場でパリーグの市内初の公式戦が行われる。三池炭鉱スト解除（一三日間）。三月三十一日・日雇い労働者組合が大牟田市役所にデモ。山田助役に面接拒否されたため、助役室に突入。四月一日・三池工業高校、福岡県に移管。四月三日・熊沢天皇、来牟。四月四日・山中末彦市議（現・田中秀子県議の祖父）主催で大相撲一行（時津風一門）

が有明町三井本社跡広場で相撲大会を開催。関脇・鏡里、大内山参加。引退している双葉山も土俵に上がったけいこをつけた。四月一日・中友小学校校舎落成式。芸者衆総出演で祝う。四月一日・田端町で殺人事件。万田坑鉱員と喧嘩した兄弟らが子供と帰宅中の被害者を襲撃し刺殺。四月一日・松屋で二四時間ストが決行された。松屋争議と称される。四月一日・三池染料の音楽愛好会が招聘し諏訪根自子氏来る。同所講堂でスペイン舞曲を演奏。四月二四日・炭都まつりにあわせて大牟田市議仮装行列。四月二五日・金毘羅神社祭りが戦前から一〇数年ぶりに復活。花火大会も五月橋周辺で挙行。四月二七日・三池港に石炭積み込みに入港したアルゼンチンのイヤバイ号に花束とビール一箱贈呈。五月一日・南荒尾駅開通式。五月五〜七日・炭都まつり始まる。花火大会は泉町金毘羅神社で開催。五月・過度経済力集中排除法により三井鉱山解体。金属部門と石炭部門にわかれる。八月二五日・大牟田市立病院設立。八月・岡田信次・小泉秀吉参議院議員が三池港を視察。九月・台風襲来し、死者一名。一〇月・経営難となった三井化学三池染料が二割相当数の人員解雇を提案。二、五〇〇名あまり解雇。一月・三池工業高校（一九五〇年当時は私立から県立への移管により三池南高等学校だった。三池工業高校への改称は一九五三年）、不況による収入減で修学旅行希望者が減り旅行中止。一二月・三池炭鉱三、六〇〇人解雇。

（いしかわたくみ 本学教授）